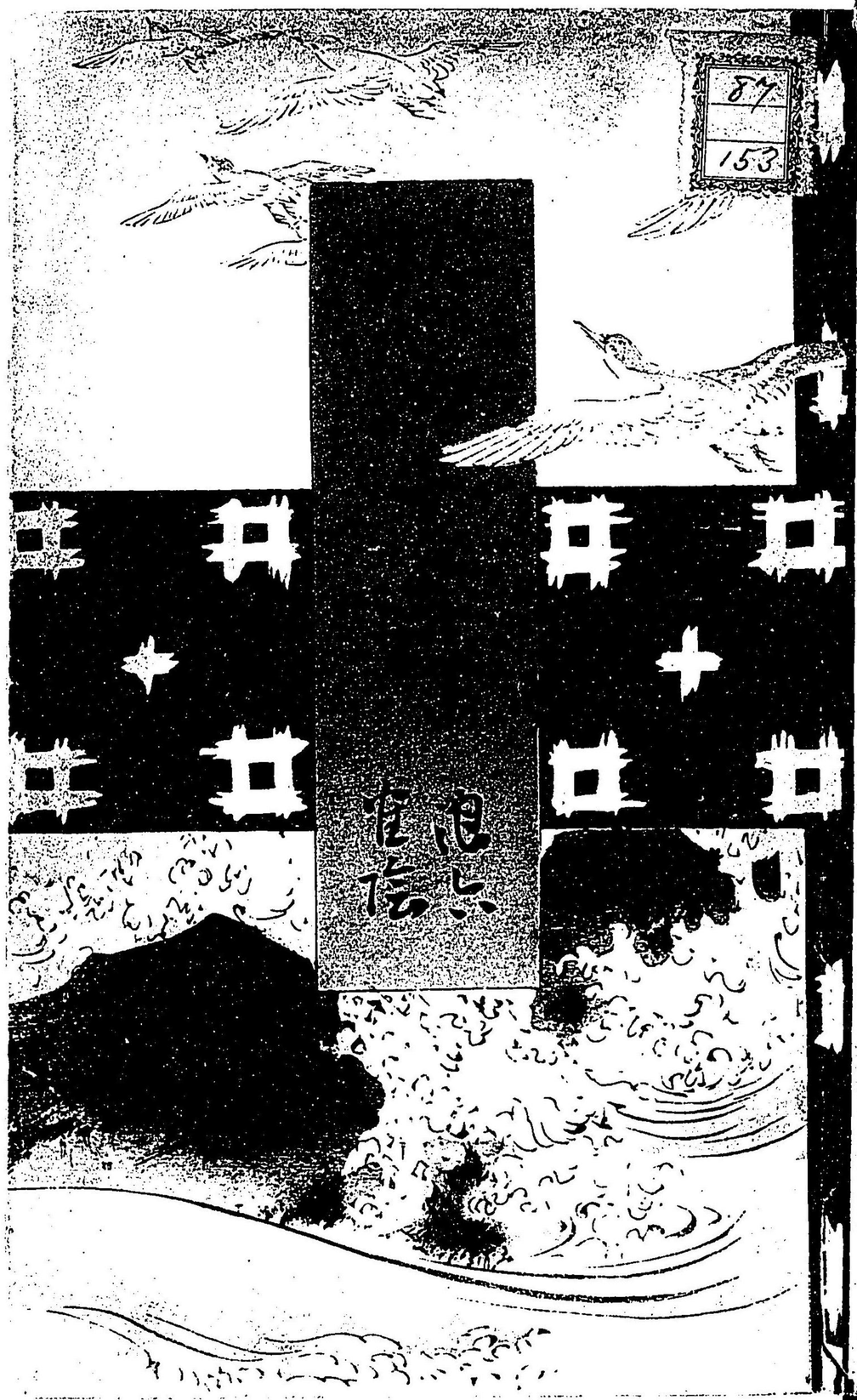

87
153
鬼怪

明治十年の序

予が幼にして泉州堺の郷里にありしころは。たま〳〵吏となりて來り任せしに、丸氏、兵に薩軍の驍將として敵味方の間に名を擅にせし中島健彰氏に要請せられ。やゝ長じては南洲翁が無二の友たりし稅所鵬北翁に從ふて東上し。また南洲翁が畏友として敬愛せし吉井三峯翁が許に養はれしがため、歲月の前後、老少の遲速。慨ひらくば當世の偉人西郷隆盛先生その人の謦咳に接するの機なかりしとはいへ。多年の見聞おのづから門外漢に等しからざるものあり。

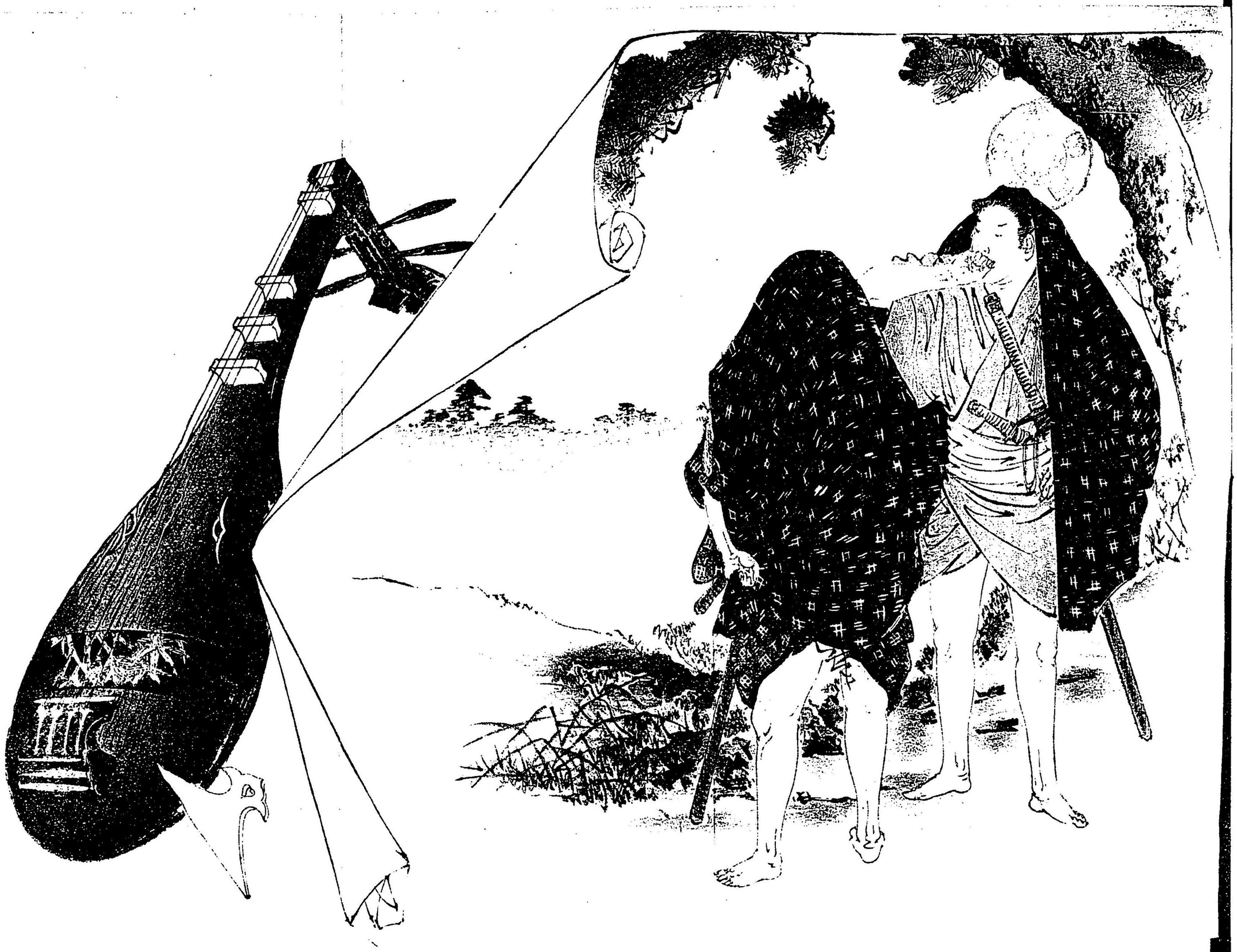
されば南洲翁に就て予が多年の見聞するところ。いはゆる世間傳記の外に於て得るところありと雖ども。かゝる偉人の秘事逸聞みだり

に今日の予が筆を許さず。たゞ他日を待て予が泉下の恩人と共に聯記細説するの時あるべし。

こゝに鶴陰子が一家より見たる『明治十年』は正に當時に於ける薩軍の一端を想見するに足る。その文を巧にせず事を奇にせずして一意たゞ童幼の眼底に映じたる『明治十年』は坊間普通の西郷隆盛が詳傳なるものよりも寧ろ却て無量の感を與ふると共に一種奪ふべからざるの眞を傳ふ。涙六これを喜で忽ち書肆に命せしもの、また其間に微意の存するあるがためなり。記して序文に代ふ。

村上涙六ゑるす

庚子初冬



明治十年

涙六

鶴陰著

むかし偲ぶの花櫻、もの思はする秋の月かげ、燈火あはき夜半の枕に思ひ出さるゝ過越方の夢の跡、げにや人の身は繫がぬ舟の、吹きすさぶ風、うちよする涙、つれなき浮世に幾度か浮きて沈みし今日までの月日のうちに、何とやらむ一際ものゝ悲哀を覺えて、いつまでも消えぬ記憶をとゞめしは、忘れもあえぬ明治十年の事、あはれ不知火の筑紫の果に涙風

さはぎし明治十年、その一年の事は今も尚、云つの小田巻くり返しては忍ばるゝかな。

予が家は鹿兒島市の東盡處、本立寺馬場といふにあり、かの名高き二王堂水と呼ばるゝ清泉にも遠からず、祖先以來、藩主島津家に仕へて、こゝに十四代數百年の久しきに亘り、殊に曾祖父は人にも知らるゝほどの功績を時の君家に樹てゝ一代の寵遇を辱ふしたれば、よしや名門勳舊の列ならずとも また尋常一般の士班にあらず、たゞ曾祖父の世に榮昌を極めし家門が、槿花一朝の夢さめて、祖父の代よりいつしか家運の傾きしを如何せむ。

予が父は維新の以後、たゞ栽培と漁獵とを日夜の樂しみとして少しも世事に關はらず、城山沒落の曉に生捕られて獄に繫がれしまゝ終に歸らざりし一人の叔父は職を鹿兒島縣廳に

奉じて大山縣令の覺え目出たく、肥後に討死とげたる家兄は英學の修行に身を委ねて縣立病院の御雇ドクトルウキルス氏の門に近び、母の兄なる外伯は父と同じく猟介みづから守りて曾て人に交らず、母が妹なる一人の叔母は當時四國の郡長たりし肝付氏に嫁ぎ、家姉は外戚の從兄たる禁軍の將校江田國道氏に緣を結びて共に他鄕の空にあり、されば明治十年以前には、予が父母に血緣うすき親族、さては知人故舊のうちにて私學校に關係せしもの、數へ來れば定めし多かりしから むに、父も叔父も家兄も、將た近親も斯る有樣なりしかば、西南戰爭の當時いまだ生れて十歲の予は、その頃鹿兒島に於ける唯一の勢力が私學校にあることをも知らねば、もとより其私學校が鹿兒島にあることすらも知らざりき。

予が七八歲の頃なりけむ、寺尾氏といへる一棗家の門前を

日毎の遊び舞臺として、いはゆる竹馬の友づれ打戯れし時、ふり〳〵何處よりか小銃を肩にせし偉丈夫一人、近づき來りて微笑を含みつゝ予等が頭上を一つ〳〵に撫でゝ過ぎゆく事あり、その頃の予等いかでかこの偉丈夫が薩南第一流の傑として將また十年戰爭の大立物たるべき桐野利秋その人と知るべき、たゞ桐野の阿爺さんが水禽を獲むとて磯の濱まで赴く往來たるを知るのみ。

予が記憶によれば、當時の桐野は頭髮を短く刈り込みて繰なしの輕き鳥打帽を戴き、薩摩飛白の綿入羽織を無造作に着流し、わざと低き木履を穿ち居たりしかと覺ゆ。

元來この桐野は薩人中の伊達者と稱せられて起風ともに絹布を纏ひしと聞きしには違へど、當時の桐野は斯くも質素みづから奉せしものか。

幼々二十年、夢に似たれど彼が破顔一笑、予等が頭上を撫でゝ更に一世の猛將とも見へざりし當時の阿爺さんは今なほ眼中にあり。

されど予は不幸にして、この桐野利秋が泰山北斗と仰ぎし蓋世の偉人西郷先生を知るの機會を得ざりき、嗚呼、たまたま郷を同ふし時を共にしながら、千載一遇ともいふべき西郷隆盛の一風采を仰ぎ見ることを能はざりしは予が生涯の遺憾とす。

時しも明治十年二月十五日、けふは目出たき陰暦正月の三日に當りぬ、思ひがけなき夜來の大雪は、霜さへ稀に見るべき暖國の人を驚かして物めづらしきまで降り積りけるに、か

ねて今日ぞと定めの手筈やありけむ、私塾校徒の先軍は、この日、この大雪を冒して鹿兒島をかしまだちぬ、さして向ふは何處の空ぞ、家兄またこれに從ふ。

この朝の事なりき、予は疾く起き出でゝ座敷に到れば、床には何某が丹精になりし猛虎の一軸さながら生けるが如く、花瓶には揚柳の小枝さしはさまれ、膳には鮒の魚を上せぬ、虎は千里の數を駈け戻り、柳は枝を垂れて根にかへり、鮒は川上に上りて再び海に入る、いづれも意味ふかく首途を祝ふ古例とぞ聞く、ことに此時いけたりし揚柳の枝は、父が嘗て長州征伐の前役に從ひ、豐前の小倉まで出陣の時、手づから折つて生けたりし柳の今は庭前に繁茂せるを、この朝、父が家兄のために一枝たをりて用ゐしものなりしと、後に聞くもまた談話の種なりける。

やがて家兄は夫れ〳〵暇乞の言葉を殘しつゝ、玄關よりせで態と勝手口の方より立出るを、今日見送りの人々は、大途の盞を持ち來りて彼の頭上に冠せたり、これも首途の古例と聞けど其いはれは更らに知らず、かくて彼は庭に下りたちしが、背に七連銃を負ひ、腰に太刀を帶せる姿の、いつに勝りて水際たちし、當年十七の若武者、天晴れとぞ見受けられぬ、されど此時はまだ何人も今回の事が天下の大騒動となるべしとは思ひもよらず、十に八九は無難に鎮まるべしと考へ居たれば、誰も今日の別れを今生の別れとは思はず、ましてや年幼き予は、悲しかるべき筈もなく、たゞ予も早く年たけて斯かる裝束かひ〳〵しく從軍せばやと羨みしのみ。

父は何とも言はれざりき、母は流石に、わけて愛されし長男の初陣を心元なくやおぼしけむ、折からの大雪、寒氣もき

びしければ如何にも其身を大切にと宣ふ、家兄は極めて言葉みじかく、多分六月の末には歸りしはむと答へつゝ、勇ましげに雪ふるうちを力足踏で立ち出でぬ、當時の光景、その後姿、あはれ思へば、これ實に永訣なりき。

予は弟の身にて斯くいはむは、いと憚りあれど、家兄は夙に俊秀の聲譽を鄕黨に負ひ、若かも生れて温厚篤實の人、父母の眷愛もまた一入なりしが、彼は平生より泰西の學術を練磨せむとの志を抱き、早くウヰルス氏の門を叩いて刺を通じ、頻りに英語を學びつゝ、予が家の一族、分家の助市氏と深く結びて、別に爲す所あらむと欲せしまゝ、最初より私學校に

は加はらざりしに、火藥庫亂入の騒動より、私學校徒一同大擧して東上せむとの風聞、はや確然に定まるに及び、入校を勸むる人も多かりしが、なほ辭して加はらざりしにぞ、果ては卑怯者と罵り、從軍が恐ろしきかと嘲ける辭も聞えぬ、家兄の素志は學問の上にあつて戰陣の事にあらず、かつは今回の騒動を戰爭になるべきはどの大事とは思はざりしも、武門の胤として尙武の國に生れたる身の、卑怯ものよ、從軍を恐るゝかと罵られては、無念骨髓に徹して、いかでか聞捨てらるべき、されば此時、奮然として擧を握りつゝ、久しく私學校に加はらざりし二三の朋友をも誘ひ合せて、もろともに東上の人數に列なるの心を定め、そのよしを父に告げ兎にも角にも從軍せむと語りぬ、彼は今年やう〳〵十七歳の春を迎へしのみ、さきには東京に遊學せむと告げしを心元なしとて許

さゝりし父母が、今度の決心を聞いて如何に思召されけむ、されど武士の父母たらむもの子弟の從軍を否むの因由なければとて、父は快く許したまひぬ、母の談話に依れば、家兄が初めて名を私學校の簿籍に名るせしを聞く、されば彼が大雪を冒して鹿兒島をかしまだちしりしと聞く、僅かに六日のみなりき。

に先だつこと、

この時の從軍はかの〳〵自ら什器を備へ調度を整ふるの習慣なりしが上に、當時の鹿兒島はかは一般に陰曆を守り、折しも歳の暮、世間の混雜、家内の多事、また一入格別なりしかば、大抵の品物は皆つきはてゝ市中に求むるよしもなく、手頃の小銃などは如何に高價を拂ふても得がたく、遲れて出軍の支度に取かゝりし人々は定めて苦心を重ねつらむ、わけて一際おくれて着手せし家兄の準備、去かも滯りなく行屆き

しを見ては、父母の心勞いかなりけむ思ひやられぬ。

家兄が從軍のよし傳え聞いて、外伯平藏氏は自己が秘藏の七連銃を家兄に與えていふ、聞きも及ばれむ、これは過ぎし戊辰の役に從ふて白川口に討死せし我が弟、汝がためには外叔喜平次が戰場に携え、死際までも伴ひし遺物ぞかし、今度從軍せむとて多くの人々は傳手を求め、頻りに望みしを謝して與えざりしは、これを汝に贈らむためなりしと、父はまた家兄に一刀を譲りて宣ひぬ、こは祖先以來こゝに十餘代、家に傳えし寶刀ぞ、銘はなけれど切れ味はいひ傳え語り傳えて確乎なり、わざと棕櫚まきのにしたるは血滑りなからむためぞ、その銃を負ひ、この刀を佩び、祖先の武勇を頭上に戴き、天晴の若武者と敵味方に知られよかしと、後日家兄が初めて私學校に出で一族伊集院早太郎氏の紹介に依りて西郷先

生に謁せし時、いたくこの太刀を賞賞せられしとぞ聞く。

佐野の渡の夕暮ならば、所柄としてなう〳〵旅人の御宿まねらせむ大雪、これは櫻田門に血潮の櫻ならねど、雪の曙に草鞋の痕をつけて、心ならずも從軍の列に加はりし家兄が、さても其後の消息いかにと聞けば、熊本に戰闘はじまり家兄は城西の花岡山に戰ふて手疵かうぶり、其場より川尻の病院に送られしといふ。

折しも同じ從軍の面々にて、淺傷重創を負ひし人々の故郷さして歸りきしもの多かりしに、父は兎にかく、母は殊更愛せし家兄が負傷せしと聞いたる以來、あはれ歸りこよかし

手疵は母が手づから繃帶せむと、口にてそ出し給はね、心ひそかに家兄が歸り來む日を祈られき、家兄は予が肥大なるにも似ず、いと虛弱の體格にして年齡よりも幼なく見えたりといへば、そが爲にやありけむ、彼と同じく病院にありし年長の人々は、餘りに彼の幼若を憐みてか、之ば〳〵故郷に歸れよと說き勸めしを、彼は健氣にも點頭で深く決心したりけむ、遙かに病院より一書を父母に寄せたりき、其文意に、

兒の手疵あさければ、癒ゆるにも程遠からじ、癒ゆるを待ちて二度戰場に臨み、決して家名と父母とを辱かしめざる覺悟なり。

と。あはれこの一書は、彼が其家を出でし時まで左しも心强かりし慶父をしていとゞ斷腸の思ひに堪えざらしめ、愛ふかき慈母をして夜たゞ涙に人知れぬ袂を濕ばらしめしとかや。

けふは四月二十日、思へば予が生涯に於て忘るべからざるの四月二十日、げに果敢なきは浮世のならひ、この日はこれ予には只一人の家兄が、あえなくも戰場の露と消えにし日なり。

これより先き、川尻の病院に疵を裏みし彼は、やう〳〵癒えてより騎虎の勢ひ、隼人の本性、ます〳〵勇を鼓して各所に轉戰しつゝ、終に四月二十日熊本の南方、木山のあたり保田窪といへる所の戰に、十七歳を一期の春として、まだ苔の花を一朝の嵐にまかせぬ、吉田大藏その人はなけれど平田三五郎を今みる如しとていづれも袖を濡しぬ、かれは十五歳の

秋、これは十七歳の春、米山の藥師の堂は名のみ殘れど、家兄が形見は今なほ家にありて涙の種となりぬ、

家兄が奠逆の友にて、共に私學校徒に加はり、同じく今度の戰爭に從ひ、幾かも此時までも猶ほ相伴ひし分家の助市氏は、彼が銃丸に胸を打貫かれて路るゝを見るや否、いそぎ駈け寄り抱き起して名を呼びし時、彼は両眼を張り唇湍を動かして何をか物いひたげの風情なりしが、重手に弱りて無念の拳を握るのみ、そのまゝ抱かれて息たえたりといふ。

彼が平生の志望は學術の上に存じ、この戰ひに一命を捨つるが如きは固より其望む處にあらざりき、されど尚武の國に生れて武士の子たる名を重んじ、一たび私學校に加はり軍旅に從ひてよりは、能く義を守り勇を全ふして潔く討死せり、その死の素志に違ふは、反賊の名を甘んじて死出三途に上り

し私學校徒の俊英みな然らざるはなし、何ぞ必ずしも家兄一人のみを愛惜すべき、兎にも角にも日本武士が最後の花を咲かせる今度の軍に加はり、西郷先生の爲に身を致せること、彼が面目に於ては、露いさゝかも遺憾なからむ。

彼は十七年の生涯、されば妻といふ最惜のものなかりき、子といふ可愛のものなかりき、彼が死をいたむものは父母と予等のみ、あはれ彼の名は予が家の系圖に殘れど、忌日命日に彼を思ひ出すもの、天下廣しといへども、予等と父母との外にはなし、父母も予等も亡き數に入らば、誰か彼を思ひ出して彼が忌日を吊ふべき、思へば彼のみは世にいはゆる一代佛たる哀れさ、あはれこの懷たれと語らむ。

後日に到りてこれを聞く、母は最初より心に何となく憂を含みて、今度の大事、迚も生きては還るまじと氣づかはれ、

出軍の時、眞綿もて一の胴衣を縫ひ、手づから家兄に與えつゝ殊更にいはれけるは、これあらば折から嚴しき寒氣も、やや凌ぐに足なむ、よしや肌あたゝくなりぬとも戰陣に臨まむ折には必ず着ごみて忘るゝなと、頃しも春の季、況かも九州のこと、嘸や暖なりしならむに、孝順なる家兄は能く母の言葉を守りて、この胴衣を自己が肌に添えつゝ討死したりき。

たま〳〵敗軍の時なりしかば、十分の手當は固より望むべくもあらず、されば同じ枕に討死せる他の三人と共に、かの二枚の戸板を合たる中に挿みて葬られしが、後日改葬せむとて屍を去らぶるに及び、他の三人は更に見分け難かりしを、家兄の死骸のみは母が縫ふて與へられし胴衣あは依然として忽ち認め得たりと聞く、戰亂の時には敢て珍らしき事にはあらねど、生別のやがて死別たるべきを察して、かゝる最

後の果までも思慮をめぐらし玉ひつゝ、眼中さらに一點の涙を漲がざりし母が當時の心情、果して如何なりけむ。

予が一族中、私學校徒に加はりて今回の軍旅に出でしは家兄の外に父の從弟たる分家の早太郎、早次郎、早五郎、早七郎といへる四人の兄弟を始め、同じく從弟たる二階堂氏、大野の氏の人々、さては分家の助市氏、母の從兄にて古渡七之丞氏まだ此上に數ふれば親族のみにても凡そ十幾人はありしならむ、鄉黨にては西隣りの内田氏、和田氏、東隣りの川上氏、さてまた路を隔てゝ相向へる矢野の氏、阿多氏、市來氏など、中にも分家の早太郎君、阿多氏の宗五郎君はわけて私學校に

重く用ゐられし人々とか、この他に遠縁の親族、相識れる故舊、もとより一つ〳〵數ふるに暇なく、父子伴ふたるもの、兄弟つれだてるものさへ少からず、予が近隣七八軒のうち、一人の從軍者なかりしは、たゞ荻野と呼べる一家のみ。

やがて熊本に戰爭はじまれるとし知れ渡りしかば、此處の家、かしこの家、東隣西隣、いづれも戰ひの風聞に明しつ暮しつ、かの人は手疵かうぶれり、この人も討死しぬ、さては何處の戰には私學校兵きはめて苦戰せり、過る日の手合には官軍さん〳〵に敗北せりなど聞かぬ日もなし、殊に最初のは大概私學校の勝利とのみ聞えて、中にも植木口、田原坂

の激戰と、遊見十郎太が驍勇の風聞は最も高かりき。

鹿兒島にては多くの人みな軍に從ひぬ、警部巡査などの如きも職を辭して出で去りぬ、よし軍に從ひ出でざるものも、日夜かの〳〵戎裝に餘念なし、されば父が叔父永田休之丞君の如きは白髮老衰の身をつとめて殊更に巡査の職を望まれぬ、ひさしく門外の公事に關からざりし父さへ、また召出されて警部となりぬ、こはその頃の縣廳にあつて、時の縣令大山綱良君より厚き信任を受けし父が一人の弟、靜吉君の推擧なりしと聞く。

父は警部の職について直ちに始良郡の蒲生地方に出張され

ぬ、折しも叔父靜吉君は大山縣令の深き內旨を嚮み、今や激戰中なる熊本私學校の本營に赴かれぬ、さるに如何なる仔細やありけむ、叔父は一旦立歸りて復命するや否、たゝちに官を辭し、更らに從軍の志を抱いて再び肥後の空に向ひ給ひぬ、父は勿論留守なりき。

何故の從軍ぞ、さても其仔細いかにと聞くに、叔父は官命を帶びて熊本に向ひし途上、國ちずも豫て親しき飯島四郎君に行きあひぬ、四郎は當時の驍將たる篠原國幹の夫人が同胞にして、叔父とは互ひに好める道の狩獵の友なりけるが、今しも戰場より歸れるなりと物語りつゝ、叔父の手を執りていふ、熊、かぬしは矢張り月給を取りをるかと、熊は叔父が舊郡にて鄕黨の間に用ゐられし彼の名なりき、これ固より一場の戲言なりしならむ、されど日頃より朴直一徹の叔父は如何

に感ずるところや深かりけむ、さらに一言の返答だに得せず、たゞ默禮のうちに限りなき感慨の情を含むで其まゝ袂を別ちやがて使命を果して鹿兒島に引返せしが、終に大山縣令が留めし袖さへ振り切りつゝ、時しも八歳を長に四人の兒女ありけるを、その妻に托し、かねて護身の短銃と愛藏の一刀とを佩び、たゞ一人飄然として從軍の途に上りしとかや。

その熊本に使ひして歸りける時、たま〳〵產れ落ちたる四人目の末の男兒は、さても親子の緣や薄かりけむ、たゞ僅かに頭を撫でゝ名をつけたるのみに出で去りぬ、されば此の幾んぞ遺腹の子ともいふべき、去かも今は二十歳を過ぎし一個の青年となれる予が從弟熊彥の名は、實に彼がこの世に生れしより嚴父の慈愛を追想すべき唯一の形見とはなりぬ。

父が出仕、叔父の發途、みな是れ音に聞えし植木口田原坂の激戰最中の頃にて、母が從兄にして家姉の良人たる江田國道君が吉次峠に討死せしもこの前後にあり、國道君は陸軍少佐として近衛少兵の大隊長なりしが、この年の初、天皇陛下に西京に供奉し、事起るに及び直ちに出でゝ征討の軍に從ひ、頃しも彌生三月四日、所は名に負ふ吉次峠にて、その時こそは敵味方と駈け隔てられしが、かねては互ひに能く知合のみか、恩誼の關係さえ淺からざりし篠原國幹、西郷小兵衛等の人々と相戰ひ、果てはかの〳〵互に武士の名譽を形見としつゝ、もろともに同じ場所に討死してけり、國道君ときに年二十九。

さても其日の戰に、國道君の一隊、わけて一入苦戰せしが、たゝ見る、薩軍の中にて天晴れ一際すぐれて美事なる武者振の一將、群がる士卒に先だちて奮闘する狀の、いかにも心憎しと小手うち翳して遥かに見やりし國道君は、やがて心に思ふ所やありけむ、涙を揮ふて自己が傍ちかき一卒を靡きつゝ、それぞと指して狙ひ撃にうたしめしが、凡はたしかに命中して、人は其場に倒れ伏し、更に起きあがらむとしては倒れ、起き上らむとしては又た倒れ、二たび三たび、ついに倒れてまた起たず、嗚呼これぞ實に南洲翁が右手と恃みし篠原國幹が最期なりき。

恩誼の關係淺からざりし篠原國幹、西郷先生が右手と恃まれし篠原國幹を狙撃せし後は、國道君みづから陣頭に顯はれ出で、傍にありし喇叭手が小銃かつとり寄せくる敵を物とも

せず縱横に射撃しつゝありけるを、その時かのが所屬の隊にかけ離れて、こゝに來あはせし今の中將長谷川好道君が、危し、あやふしと頻りに呼び返したる言葉を耳にもかけず、本の雫、末の露、終に亂軍の中に屍を横へたりしと、予は人の斯く物語るを聞くごとに、この時に於ける國道君が心情には、ふかく憐むべき仔細のありしあらむと思ひぬ。

この戰ありし夜、當時私學校徒たりし彼の、古渡七之丞君に向ひ、驚きたまひそ、君、君が一族なる江田は今日討たれにけりと告げたる人ありしといへば、彼れの討死はたゞちに敵陣に知れ渡りたるものならむ。

その始め私學校徒の勝利多かりし頃には、戰死せし人、手疵のもの、皆いづれも能く知れ渡りたれど、家兄が討死せし時は恰かも八代口の官軍が熊本城に連絡を通じて私學校徒すでに敗北の色みえ、鹿兒島との交通さへ殆んど絶えあむとせし折柄なれば、いかにせむ其消息は容易に聞かれざりき。

それと口には宣はねど、父母の心中、すでに家兄は此世に生きてあるまじおど、覺束なき物思ひに明し暮さるゝうち、昨日までも夢安かりし鹿兒島の地が修羅の巷とならんず願ぎに、予が一家ことごとりて近村吉野といふに立退きぬ。

當時この遊の官兵を追拂はむとて肥後より歸りし私學校徒の中には、打連れて諸共の道途に出でし分家の助市君はあれど、家兄の名は更に聞えず、さてはいよ〳〵亡き數に入りしならむと思はれしも、たゝ戰亂の中とて何處に助市君のいま

すやらむ、就いて尋ぬることも叶はず、たしかに夫と思ひ諦めながらも、なほ萬死の一生を得て歸り來ることありもやせむと、果敢なきことを空たのみに頼まれき、あはれ燒野の雉子、夜半の鶴、なみ〳〵の病氣の床に思ふ存分の介抱を盡してさへ、子に先立たれては親心、思ひ諦らむべき道のあきものを、ましてや日頃の素志に背いて只一片の意地に走出で、いはゝ悲しき武門の外聞を立てぬかむがために、戰場の塵となり果てたる家兄を、最愛の長子に持ちし父母が、その屍骸を見るまで、よもやと幾度か萬一をたのまれしは、まことに慈親の情愛ぞかし。

鹿兒島の市中に戰爭はじまるまで、予が屋敷の長屋に住みたりし男に、なにがしの松太郎と呼べるあり、いづくにてか助市君の姿を認めし時、親しく家兄が討死の模樣を聞きたれ

ど、當時は相別れて立退き居たれば、傳え聞くべき機會もあらず、繋がる親族、さては知人の間に家兄が死を人傳に聞きしもあれど、みな秘して予が父母の耳には入れざりき。

その頃の風習、討死せし人の家は何とやらむ面目ありて肩身ひろき風なりければ、彼の死を告げたりとて左まで氣の毒にもあらざりしならむに、人々の斯く相秘して告げざりしを見ても、予が父母は平生いかに深く彼を愛せしかを知るに足りなむ、されど中には突然の弔辭を陳べて、いまだ慥かに彼の討死を信じざりし父母をして、その返辭に迷はしめしもありしとか。

多年の後なりき、母上かつて予に語り給ひぬ、家兄討死の　よし慥かに聞いてよりは、あるはまた覓人に取り殘され、さては兄弟うたせし人々と相語り、互

ひに自己が心情を吐べて慰め合ひしに、いづくの家、いづれの人も同じ歎きに伏柴の、世間かしなべてのことなれば、わが身一つに秋の哀れを掻あつめしとは思はず、すこしは心强かりしが、たゞ鮫島四郎君の夫人に逢ふごとに、あはれ四郎の如きは年も早や男盛りを過ぎつゝ、よしや天命これより生き長らえたりとも、既に成さん程の事業は成とげつ、偖てびの戰爭に討死せしは、身に取てせめてもの時、露さらくに歎くには足らねど、いかに後れ先だつ浮世の習ひとはいへ、わけて可愛き御長男なぞが、まだ前途の三春の希望を負ふて、葉末の露の消え果敢なくなり給ひしは、ものゝ悲哀の至極と、涙を呑みて慰められし折には、偖りの忝さにいとゞ袂を絞りたりきと。さもあらむ、さもありなむ、母上がわけて秘藏の子なりけるまゝ。

家姉のものがたりに依れば、官軍の方は流石に交通遞信の
たよりも自在に、萬事さはめて叮嚀に取扱はれしまゝ、國道
君が討死のよし其筋に聞えし夜、時の陸軍大輔西郷從道氏は
築地なる中井櫻州翁の邸に、繫がる緣の弟、江田國容君を招き
寄せつゝ、慇懃に其訃音を告げられしといふ。

聞く、國道君は征討の軍に加はり東京をいで立つに臨み、
心すでに死を決し、ことし四歳の愛兒を家姉に托して、名み
じみ其死後の遺言をせし程なれば、家姉は心に深く覺悟し
ながら、それと傳え聞いたる夜は、あはれ夢かと思ひ迷はれ
つゝ、無心に眠れる稚兒の顏つゐ〳〵と打ながめ、泣かじと
袖をかみしむれば、たゞ生憎に涙のみ催されて、いつしか頬
邊の痩せを覺えしとぞ。

當時東京日々新聞に「豐吉の談話」と題し、こまかに從軍
の始終をものされし國道君の馬丁あり、主人を失ふて自己一
人戰場より引返し、具さに其をり〳〵の狀を陳べ、偖ものが
たりていふ、一日、御供して過ぎし修羅の巷となりし跡を過
ぎりしに、主公は忽ち手綱を扣えて取り殘されし一賊の死體
を指さゝれ、あれ見よ、さても憐れの事をしてけり、彼は我
が弟なりと宣ひしとは云るを、家姉が胸には何とひいきけむ、
豐吉が談話の緒口さえぎりつゝ、良人には私學校に加はりて
今度の戰場に出づべきはどの年頃の同胞、ふるさとに御座さ
ねば、汝は必らず姜が實家の弟なるべしと、思ひがけねば思
はず悲嘆の涙に暮れけるに、豐吉は、あはれ詮なきことを語

り出でゝ更に愁歎を重ねしと、返すがへすも氣の毒にや思ひけむ、その日その儘に辭し去りて後、いかに論せど二度この事を語り出でず、されば家姉は委しき顚末を知れるにはあらねど、その弟たる家兄の討死せしを疑はざりしとか。

國はおあしく肥後なれど、頃はおなじく春なれど、國道君は三月の四日に陣沒し、家兄は遲れて四月二十日に討死せしことなれど、戰場に認めたる屍骸は彼あるべくはあらざりき、さては國道君が見誤りか、馬丁の豐吉が聞誤りか、今更えるによしなけれど、家姉が東京の家にあつて、その弟の討死を聞きし時には、彼は正しく世に亡き人の數に入りたる頃なりし、辭國なる故郷の予が家にては、まだ夢にも彼が訃を知らざりけるに、海山三百里の空より朝夕たゝ冥人の安否いかにと氣遣へる家姉の耳に思ひがけなく傳はり、官軍の一將校たりし國道君の討死が、その夜たゝちに其敵たる私學校中に傳はりしも、思へば事の不思議、あゝ、さても此時まで生き長らえてありける家兄が、曾ては共に力を假さむと心に誓ひ、互ひに相期する所ありし國道君が討死せしと傳え聞いたる時は、嘸やさぞ、そゝろに無量の感慨に打たれて、戈枕の夢を

や結びかねつらむ。

ことし二月、時ならぬ涙風こゝろ筑紫の果に願ぎし以來草を敷寐に戈を枕や、人心みな戰爭の評判に向ひ、たゝ物さわがしき中に月日ながれて、兒童が日ごとに通ふべき學校は何時しか閉され、つゝ、運動場には名も知れぬ雜草いたづらに

生ひ茂りぬ。

予が郷黨にては、當時予より三つ四つ年長なりし西田雄藏丸田十郎太などの面々、かく徒らに遊び暮すはよろしからじと、やがて夜ごと輪番に各自の家に集まり讀書することゝ定まりしも、その讀書は四書五經の如き漢籍の素讀にて、平生小學校の教科書わけて地理歴史を面白しと思へる予には何として嬉しかるべき、たゞ郷黨一般の企なるまゝ務めて出席せしが、肥後の方は戰爭の最中にて、昨日はかく、今日はかくと到る處の評判に、小兒ながら何事も手につかねば、いつしかこの會讀も、時ならぬ五月雨に流れ了んぬ。

予は此頃遊び仲間と此處彼處に集まり、竹の小銃、木の大砲などを拵へつゝ戰爭事に餘念なく、火藥雷管を玩びて御山の大將と跨りゐたり、是等の品は今日こそ取締もむづかしく

なり容易に兒童等の手に入らねど、その頃の鹿兒島には珍らしからず、かの火藥庫亂入の騒動に落ちこぼれしを、そのまゝ拾ひ上げて玩びしものも尠少からざりき。

その頃予が屋敷内なる小山の北手に當り、奥山と呼べる家の少年友次郎は、予と郷黨を別にしたれど、かつて同じ長谷小學に通ひしものなれば、一日たづねゆきて共に遊びける折しも、この邊の少年原が日々こゝに寄り集まり、此家の畠より予が屋敷の小山の下まで掘込みある奥深き横穴の中に、今は何といふやらむ其ころ木管とか朱管とか稱へし大砲の發火信をはじめ、銃砲の裝藥に用ゐる種々のものなど貯へあるを見出しぬ。

さてと予は心に默頭ぬ、日頃より兎角に面白からぬ奴輩に一泡ふかすは今なりけり、いざやと其夜群童をかり催ふし手

に〳〵大なる米袋を携えつゝ、一々に奪ひとりかの〳〵分捕の功名に誇りしが、誰あつて予等が仲間の悪戯とは知らざりき、いつしか十三四年を夢とみし明治二十四年の秋、予は東京にあつて其少年原の一人なりし田代虎之輔といふに逢ひ、この時の始末を物語りければ、田代は手を拍て、この十三四年來の疑ひ初めて此處に氷解せり、その時の盗賊、さては御身なりしか、ぬかつたる事して功名手柄させたるぞ遺憾あれと、はてはさん〴〵に打笑ひぬ、あはれやこれも一場の夢、その田代も今や世に亡き人となりぬ、彼より此談話を傳え聞かざりし人々は今尚いぶかしと思ひをるものあらむ、念のためにいふ、その時分捕の功名に誇り意氣揚々たりし小盗賊の張本人はかくいふ予なりき。

その頃の事なりき、一日、軍艦數多きたれりとて人々罵りさわぎぬ、もとより軍艦好の予等少年仲間いかで猶豫すべき、たちまち隊を組み急ぎ祇園洲の濱に到れば、沖の方には鹿兒島人が外車の白壁として、よく識れる春日艦は、すでに離れて兵先にすゝみ、ついいて日進、筑波、清輝なんぞ、これに連送船を幷せて舳艫相銜み入り來りつゝ、威勢よく排列して徐ろに短艇を卸し上陸するの有樣、かつて見し外國軍港の畫を眼前いま實地に見る心地して、その壯觀いふばかりなし、こは黒田參議以下の人々が、特に島津久光公のもとに差遣はされし勅使柳原前光公を護衛し來れるものなりしと。

私學校徒は背後を空うして悉く肥後を指しぬ、鹿兒島には

防禦の用意あらず、さながら人あき境に入るが如く、官軍は思ひのまゝに占領しぬ、かつて英人と戰ひし當年の紀念たる所謂る鹿兒島の長城たりし處々の砲臺は毀たれぬ、やがて勅使の一行は後の日長崎に斬られたる大山綱良君を誘ふて歸り去りぬ、鹿兒島の守備たるべき陸軍と二三の軍艦を除いて他は悉く出で去りぬ、新縣令岩村氏は來りぬ、程なく肥後日向の方にありし私學校兵は官軍を追ひ拂ふて鹿兒島を取戻さむため歸り來るべしとの風聞さきに聞えぬ、さては近日こゝも戰場にあるべしと鹿兒島市は騷ぎたちぬ、人々はそれ〳〵思ひ〳〵に難を避くるの用意に取かゝりぬ、このうちにも月日ながれて賤が袖垣の卯の花も散りゆき、いつしか菖蒲草ふくてふ皐月の下旬となりぬ。

遠からず戰爭あるべし、近きうち鹿兒島は灰となるべし、油斷なせそとの風聞ぱッと立つて人々は騷ぎ出しぬ、新縣令は布告を出し、妄りに動搖して騷ぐべかずと、諭されしも、この評判は大波のおし寄するが如くに日を重ねてます〳〵高く、市中の人は皆いづれも家財道具を取片づけ、あるは地を掘りて埋めかくし、或は荷つくりして馬に運ばせ、舟に積み、さてはまた自ら擔ひおゞして、おもひ〳〵の方に立退きぬ。

予が家にては、たま〳〵本年四歳になれる幼弟が、過ぐる頃より病氣にかゝりて、次第に重りゆくまゝ、彼方此方と伴ひゆかむは、病のため宜しからず、幸ひにも予が家の背後な

る小山の蔭は萬一の時にて忍び潜みて飛び來る矢玉を凌ぐの便利なきにしもあらねば、なるべくは立退かじと一家ことゞく止まりぬ、時に予が家の最寄にては親族永田氏の一家これは母君の病牀にはせしまゝ、詮方なく踏みとゞまりし外には、心づよき老人の我家の守せむとて態と家族に離れ自己ひとり殘れるもの二三人あるのみ、大風の吹きやみたらむ後もかくやと思はれぬ。

つね日頃遊び戯れし近隣の兒童は、いづれも立退きて今は一人も居らずなりぬ、かねては餘り中よからず、爭ひごとして父母の裁判を待ちしことも稀ならぬものと、彼かに此上もなう親うなりゆきつゝ、かつて結ひめくらせし兄弟の墻はやぶれて、朝夕に秩つらねて遊び暮しぬ。

ある日の事なりき、官軍の兵士一群、ながき竹竿に數十羽の鶏を繫ぎ、二人しておのゝ一端をもち予が門前を過ぎぬ、さても何處の主なき家に入りて捕へ來にけむ、思へば不法の振舞かなと予は小兒心にも不平に堪へず、弟もろともいざ父、上に告げまゐらせむと、内に入るを追ひ來りし兵士數人いぶかしげに、人々は悉く立去りしに何とて此家のみ斯り殘り居らるゝやといふ、父は出で給ひて幼兒の病めるよしを語られしに、年もつとも若き一人すゝみ出でつゝ、さぞ御心配のことならむ、よしや此地に戰爭はじまりても永くは續くまじ、されば暫時のこと、折角大事にいたされよ、重ねて御見舞ひさむと、懇ろに挨拶し、折しも庭に立ちゐし予等をもいたはり出でゆきぬ、父は其あとを見送り、いかにも言葉たゞしく禮義を知りし人かな、恐くは由緒ある人の兵卒となりて此度の合戰に出でしならむ、鎮臺ありとて、かくの如き人あり、

みだりに悪く思ふなと予等を戒め給ひぬ、鎮臺とは當時鹿兒島の人が官軍の兵卒を呼ぶ總稱なりき。

予等は物さびしき中に日を送りぬ、さても一日の曉方なりけむ、烈しき雷のやうなる聲に夢を破られ、いそぎ二階に駈け上れば、父は近頃まで此邊の戸長たりし本田何某と酒くみ交してゐはせしが、予をさし招き、あれを見よ、あれを見よ、何と凄じからずやと宣ふ、まだ覺めぬ眼こすりて打眺むれば、西の方、城山は硝烟に埋まれ四邊濛々たる間に、砲火の間斷なく光り閃めけるは稲妻よりも物すごく、市中は渦まく焔に包まれて折々聞ゆる餘波の聲、ものゝ凄みを添えし滿城の光景そも何とかいはむ、その頃の予、何の心もなくたゝ驚き呆れて眺めやるのみありしが、今さら思へば實に絶世の奇觀にして、平和の日、たとひ千萬金を積むも、たゝの一目すら望むべからざるの大活劇なりしなり。

この朝、暫時にして砲戰はやみ、只とき〳〵小銃の音のみ聞えしが、市中ところ〳〵の火は消しとゝめむる人もなきまゝ、然え廣がりて天に滿ち、むらがる黑烟はさし上る太陽の光輝をつゝむで晝なほ夜のごとく、夜に入りては逆まく火焔天を焦がして夜なほ白晝のごとく、やがて火勢はいよ〳〵募りて予が家に近づき來りぬ。

かくては所詮こゝに留ることも叶はじと、この夜、母は病める稚弟を抱き、次の弟の手を執り永田氏の人々もろとも俄かに鹿兒島を立ち出で、吉野村の方へと志ざし給ひぬ、女子供のみの夜道さぞや難澁ならむと、途中なる雀か宮に永田氏の知人を頼み、こゝに一泊して明くる日、一本松といへる所に予と父上とを待ち受けらるゝの約束なり。

この夜、予は父上もろとも家にあり、終夜うち棄ておかれし重要の家財道具を家の背後なる倉庫に運びぬ、父が少時拳職せられし時、新たに調へし警部持の提灯、いまだ壁にかけ置しを指しつゝ父は宣ひぬ、聞く官兵は往々私學校兵と同じく縣廳警察につとめし人を憎むと、もしや留守中にふみ入り見出しなば、或は猥藉の種となるべし、深く隱し置けよと予に指圖されき、家の背後の倉庫のみ頼みにせしは、屋敷を隔てし丘上にあつて決して類燒の憂なしと思はれしが故なりき、

かねては立退くまじと、何の準備もせざりし予が家なるに、かゝる危急の時となつては早や人手を求むるによしなく、父と予とのみなれば、充分の始末は固より望むべくもあらず、兎にも角にも取片付けて倉庫に移しおはりぬ、かゝる上は病める稚弟と足手纏ひの次の弟とを伴ひゆかれし母上の事こそ

心元なし、今ぞ道路の通行に妨害おからむうちに、いで追付かむと、曉方の露をふみつゝ永田氏の休之丞君を伴ひ、一行三人、道を急いで一本松に到れば、母上は恙なく待たせ給ひぬ、こゝは永田氏の知邊なれど、村離れの一軒家にて、とても予等の一行この家に泊まり難しと思へば、たゞちに打つれ立ちて中別府といふを指して足を進めぬ、この中別府の里は鹿兒島を去ること二里、すでに予等に先立ちて立退ける人々の多くはこの里に通れ來て、假の寓居を定め居れば、予が一家も、永田氏の人々も、かの〳〵此里に假寢の夢を結びぬ。

この朝、父上もろとも鹿兒島を立去る時も、渦まく火焔はなほ熾に燃立ちて、さらに何時消ゆるとも見えざるに、吹きつくる風は一入火の手を煽りぬ、かくて分家の背後なる岡を越え永田氏にゆく途すがら、父は南の方を指し、今しも一團

の猛火が舌を出して見事の建物を舐め去らむとするを見、彼は宮之城の家ありと宣ひ、さらに又た哀れ七十餘萬石の城下も、この一日一夜のうちに空しく燒里が原となつたりけりと、いくたびか大息を洩し給ひしには、予も坐ろに物かなしく覺えぬ。

折しも路に怪しき人聲、何事ぞと見下せば、官兵三、四人、如何にして逃げ後れけむ、予より二つ三つ年たけし一少年の背に風呂敷包を負ふて走りゆくを、何心なく誰可せしものなるが果ては其中の一人、さと劍を拔きしに、少年は氣も心も身に添はざる風情、たちまち足を擧げて韋駄天と走りゆきぬ、後にこの少年は、後迫なる芦谷氏の從僕なりしと聞きぬ。

やがて予が一家は吉野村なる中別府におちつき、閑といへる一農家の表座敷を借りて住ひぬ、すべて此あたりにて少しく體裁よき家々は、逸早く移りきし人々に占領されて、この頃まで取殘されし家の粗末なるはいふまでもあけれど、予が一家が假の住居になしたるは、建築の新にして汚れざりしがせめてもの幸なりき。

もとより俄かに立退きし事とて、衣服調度の用意充分ならず、召し仕ふべき奴婢は諺にいふ三代の主從とは變り、四季そのをり〳〵に雇ひ入れしものゝみなれば、すは戰爭と風評にたちしより、薄く輕きは人心、われ一にとそれ〴〵仔細らしげの遁口上もて暇を乞ふもあり、中には親兄弟みづから迎ひに來りて連れ歸るもあり、されば中別府に移りし頃には踏

みといまつて手許に仕へしもの一人もなかりしかど、かゝる常ならぬ時のあらひ、いづれの家、いづくの人も大方は同じさまなれば、肩身せましとも思はず、かへつて氣も心も勇みたち、左までの不自由は感せざりし。

間もなく鹿兒島との通路あはいまだ塞がらず、往來も叶ふよし聞えしかば、立退きし人々のうちには、おの〳〵自己が家を見むとて出でゆくもの少からず、予も一度は父に伴はれて、其日雇ひし一人の從者もろとも、住みすてし故郷の空やいかにと尋ねゆきぬ。

たゞ見る到る處に焦げたる土塊、燒けたる石瓦、堆きまで市街を埋めて、門構いかめしく甍つらねし此處かしこの家は、みな一樣に燃え失せて、きのふの面影いづくにかもとめむ、家ちかき樹木は悉く烟に咽びて枯れ凋み、すみか燒かれし悲

家の犬、猫、人さたはしげに駈けくるさま、かゝるべしとは豫ておもひ設けしものゝ、また流石に哀れを催しぬ、

さても住み馴れし予が屋敷いかにと尋ねゆけば、思ひの外のさまや、かならず無難なるべしと家財家具をうつし入れたる倉庫はまづ燒けかち、眞先に燒け失せむと氣づかはれし家は、西方の壁板のみ少しく燃えかけしのみにて、隣家近所に建てつらねし棟の、ことゞく燒け落ちしが中に、不思議にも獨り燒け殘りてありしが、程なく類燒の難にかゝりぬ、この時さばし燒け殘りしは、折しも風の吹きやみしため一時たゞ火つけ人の眼につかざりしものならむ。

かならず無難なるべしと思ひ頼みし倉庫の、まづ燒け落ちしは、中なる家財道具を取り出して後、ことさらに放火せしものならむ、いかに燒け爛れても形そこなはぬ金具は消えて

跡なく、さては數すくなからざりし刀劍の類が燒及となつて殘りしもの只一振もあらざりき、世のため人のため逆をうち名を正す王者の師に、これらの不義を働く人あるべしと覺えねど、分捕といふ名の下に、よからぬ所爲せし例も少からざりしと聞けば、予が家の倉庫を燒きしも、かゝる徒輩の惡戲ならむ。

たち並ぶ人家を燒き拂ふて防禦のたよりとし、火勢に藉りて士氣を鼓舞し、時に用ゐて篝火に代ふるなど、今更めづらしき譚柄ならねど、何の關係もなき隅々はし〳〵の家まで隈なく燒き立てし官兵の所爲には呵しく思はるゝ節なきにしもあらず、まして眞僞はいまだ知らねど、土地の人にて心術いやしき奴輩が、人の依頼に乘りて夜々所々に放火したるもありきとか、さればその頃鹿兒島の人が「火つけ」と綽號して

惡魔の如く忌み嫌ひしは、全く斯る輩に與えし一種の流行言葉なりしが、いつしか私學校徒の耳に入りて、それぞと疑はれしもの處々に斬り捨てらしは、たゞ二人三人にはあらざりし、されど、これはこれ彼日の事のみ。

さきに鹿兒島を立ちのきしは俄かの事にて物はこばむと頼むべき人手もなく、携えゆきしは僅かにおの〳〵が一二枚の着替のみ、されどこの日伴ひゆきし一人は、日用の品物を持ち運ばせむためなりしに、思ひ頼みし倉庫は心なき放火のうちに先づ燒け失せて、その跡すらなければ詮方なくも燃え殘りたる家のうちに、取り亂されし家財二つ三つ拾ひあつめて、むなしく假の住居に引返しぬ。

さて程なく鹿兒島への往來途だえぬ、かゝる上は爭で再び家もなく人もあらぬ彼處を尋ぬるやうもあらねば、予が一家

は此里に暫らく假寐の夢を結びしが、げに思へば重ね〳〵の薄命不運、言葉に餘る憂愁のかず〳〵取りあつめしは、この頃の予が家なりき、

よしや一家の上、一身の上には限らぬ今度の騒動とはいへ、思ひを苦しめ心を痛め、はては住み馴れし故郷は、燒野が原となりて、たゞ名ばかりよし野村の中別府に、詫しき山里の假ずまひせし予か一家に、天道、是か、非か、無常一陣の風はこゝにまた稚なき弟を誘ひゆきぬ。

あはれその病ひの床につきしは未だ鹿兒島にありし頃にて、彼が生命に關はるほどの容體ならざりしが、身を動かしてはよかるまじ、及ぶべくは此まゝ留まるこそ此兒のためならむと、折しも世間の人が我先にと立ち去るを余所に眺めて、暫らく鹿兒島に留まりしも、所詮ふみとゞまることの叶はぬ事

となり、やむなく此處につれ來りしに、病氣は次第に重りゆきて恢復の色さらに見えねば、父母の心は如何なりけむ、住み馴れし故郷を彼方の空に、今はかゝる山里の假住居、かもふに任せぬことばかりなれど、流石に醫師のみは近侍に立退き來りし馬場なにがしといふを呼び迎えつゝ、力のかぎり兎も角も心のこらぬほどの介抱、つゆ如才なかりしが、定まれる命數は人の力に及ばず、ついに六月十四日はの〳〵と明けゆく空の引潮に、慈母が情愛の右手の腕に抱かれながら、あはれ葉末の露の白玉と落ちて、短かき四年の生涯を此處に終りぬ。

浮世のならひ、人情の常、子を持てる親々が殊に可愛きものと聞く末の乙子にうまれ來りし彼は、また死すべき子は眉目よしといふ諺に背かで、さかも極めて賢しかりしに、一夜

の嵐たちまちこの幼兒を奪ひ去つて空しく名のみを浮世の紀念にといめぬ、されど戰亂の最中、この山里のこと、心のまゝの葬儀も叶はず、たゞ宿の主人の勸が手に細工されたる手細工の柩におさめて形ばかりの式を備へ、かりに吉野村の墓域に葬りぬ。

折しも縁に繋がる親戚故舊、東西南北にかけはなれて暫時の宿を思ひ〳〵の所に定めねたれば、告げ知らすべき途もなく、たゞ予等兄弟二人の外てゝに立退きねたる永田氏の人々が蕭々として淋しく哀れなる柩の後に附從ひしのみ、これより後、日毎の夕ぐれ、予は母に伴はれ次の弟の手を引きつゝ稚なき墳墓に詣できつ、時には野咲きの姫百合を折りて心ばかりの手向に、母が袂を絞らしめしも幾度か。

、鹿兒島を出でしは六月の初旬、いつしか假寢の夢も馴れしきのふけふ、もの淋しきこの中別府の景色にも馴れぬ、居るところは戰場に遠からねど、私學校徒の防禦線を離るゝ一里半の後方なれば、さらに危險の憂慮もなし。

ある日の朝まだき、ひとゝ〳〵顆りに罵り騒ぎて、無數の官兵牧が岡に上れりといふ、村盡處に馳せいでゝ遥かに東北の岡を望めば、人か、馬か、幾團の黑塊てゝかしこに蠢きぬ、これぞ征討參軍の一人、海軍の河村純義君が自ら陸兵を指揮し、武の岡方面の私學校徒をやぶり、遠く肥後日向の方に追ひ拂ひし日の出來事にて、今かしこに見ゆる一隊は、大隅國

重富郷より夜を籠めて四辺に聞えし白金越の難路を経、吉野村なる私塾校徒の背後に顯れ出でしなりき。

父は予を呼び給ひつゝ、この近辺もやがて戰場とあらむ、まゞ〳〵と此里に留まらむより何處にか移りゆくの用意肝要と宣ふ、予は打驚きしが、此時すでに官軍の先鋒は近き處まで、攻め寄せけむ、小銃の音間近く響き、流れ弾の二つ三つ坐せる様先に落ちけるを、家主の婦は其一個を掘り出して予に呉れたりき、されどいまだ戰場となれるにあらねば、永田氏を初め人々の中にも今暫時ふみとゞまりて後、兎も角もせむといふもの多かりしが、予が父母は此里にあるも、何處にあるも同じく假の宿、去ねて留まるの用もなし、いづれは戰場となるべき此里に心願がしき日を送らむより、余所に立退いて安穏の枕高く眠るに如かじと、この日たゞちに別れを告げつゝ一月あまり假寢の露を結びし中別府の里を立ち出づ、

さして志す方もわらねど先づ帶迫なる私塾校兵の本營を訪ふて、今日の戰狀を聞き、さては母が實家江田氏の人々が立退きし谷山の郷に赴かむとの心にて。

中別府を出づ、この時は早や戰場ちかくなつたるまゝ憐れなる稚弟を假葬せし野中の墓畔に立寄りて別れをのぶるの暇さへなかりき、此里より帶迫にゆくには戰場の傍に沿ふて官兵の矢面を迎りたれど、幸ひにも此辺の道路は、低ふして堀溝の如く、両側に畑地たかければ、弾丸は皆頭上を掠めて飛び行きぬ、

予等は我先にと馳せゆく數多の人々に打まぢりて急ぎしが、恐ろしきもの見たきは人情の常、中には延び上り立ち上りて戰場を望み見つ果ては堤を攀ぢ畠に迄出でゝ窺ふ人も少から

す、予も幾度か駈け上りて覗き見るに、官兵の方は能くも知れざれど、私學校徒は散兵を布きて、あるは森の陰に立ち、あるは畑の畦に俯し、頸りに銃を放つて寄せくる官軍を拒ぐの樣あり〳〵と望まれぬ、時あらぬ稲妻の銃口に閃きつゝ一道の白烟ぱっと立ち上るうちを、手負にやあらむ味方〳〵が兵士に伴はれゆくさま殆んど畫の如くに思はれぬ。

帶迫ちかうなれば矢先も外れ、距離もやゝ遠くなり、両側の堤も低うなりぬ、予等はゆく〳〵弓手の方に今日の戰爭を眺めて馳せゆきぬ。

やう〳〵に私學校徒の本營に達しぬ、けふの戰に關係あるもの、さては逃げ奔りて此處に來りしもの、さては海手深手を負ひし人々とり〴〵に集まりぬ、重手を負へるは竹輿に扶け載せられ此處に運ばれしが、中に如何なる氣丈の人なりけ

む、一左なりしか、右なりしか、能くは覺へねど髮のあたりに微傷一個處、去かも彈丸は皮膚と皮膚との間に狹まり、いまは膨脹みをるを事ともせず、自ら重手の人を荷ふて來れるもあり、門前に立ち居し予が側に下されしは痛手の一人と見え、胸の邊を射ぬかれ血に染みたるが、折から烈しき炎天に照りつけられて如何に苦しからむ、去ばしなりとも苦痛を助けむと母上は近く寄りつゝ傘にて翳し蔽はれしに、竹輿の中よりは頸りに水を〳〵と哀れにも虫の啼く音に乞ふ、母上は暫時ためらひ給ふうち、又もや苦しき息に水を〳〵と呼ぶ、いざさらば進じまゐらせむと、傍の手桶より柄杓のまゝに汲み與えむとせられしを、いづくよりか一人の兵士飛ぶが如くに馳せ來りて水をやつてはと叫びつゝ柄杓もつ母が手を留めぬ。

今日の樣を聞かむとて本營の中に入り給ひし父はいまだ

歸り來ますず、戰爭は左して烈しくなれりとは思はれねど、落ちくる流丸は次第に多く、わけて彼方に見えし孟宗竹の林に中る音いとゝ凄じ。

予は母上の指圖に從ひ、營内にすゝみ入りぬ、見れば此營にても官兵を拒ぎといむるよしなく取片付けて引退かむ用意最中にて、樣先より庭にかけて居並ぶ兵士は穆なからの酒くみかはしつゝ何事をか相語りて笑ひさゝめき、時には飛びくる彈丸の見えざるやと怪しきばかり沈着ゐたるは、數度の戰場を經來つたる武者どもの酒宴ならむ。

父上は此一群の中にはしぬ、予は母上の言葉を傳え父を促し、母上、次の弟もろともに西の方谷山さして此處を立ち去りぬ。

吉野の中別府を出しは其日の朝ありき、されどゆく途に思ひの外の時を移しぬ、まして母上をはじめ、予も弟も皆徒歩なるに、わけて乾蒸の炎天に路はいよ〳〵捗らず、此日はわづかに四里に足らぬ下田といへる片田舍にて、長き夏の日も山の端に沈み、むら鳥の塒もとむる影もいつしか黄昏れぬ。

ゆく先はまだ程遠し、去かも山坂多き路あるを、足弱き十歳の予と、六歳の弟を伴ひ、今宵の中に行きつくべくもあらねば、此村に一夜の宿を求むるの外なけれど、戸數も多からぬ片山里、殊にきのふけふは此邊まで立退きし人も少からねば、俄かに宿をもとめむと固より叶はず、さればとて此近傍に便るべき方もなし、さて如何にせむと父母はいたくも案

と煩はれぬ。

實に嬉しくも嬉しきは斯らむ時の人の情愛、たま〳〵自己が門邊に立ち出で、逃れ來し人をとゞめて今日の顛末を聞き合せゐたる婦人、予等の一行に言葉かけつゝ、さては母上と物語りしておはせしが、かつて予が家の名を聞き傳えられしと見え、花もなき夏の夕、行きくれて宿らむ家もなき予等を深く氣の毒と思しけむ、狹く見苦しきを厭はれずばと、やがてその家に伴はれ、家族の人々にも引合せて快く一夜の宿を貸されしがば、僥倖にも袖に露おく野宿の憂を免かれぬ。

けふ予等を此家に伴ひ給ひしは主人の母君にて、主人の名は白石武彦と呼び、ことし十九の青年、こたび私學校に加はりて肥後に戰ひ、手を負ふて故郷に歸り、いまは此家に疵を裹みてありしが、かつて家兄と同じ學校にあつて能く相識り

しと物語り給ひぬ、あはれこの夕、この話を聞き、この人を見し予が父母の心は、知らず將た何處にか辿りゆきけむ。

この夜、此家にやどりしは予等の外に、同じ哀れの宿なき人も多く泊り合ひぬ、廣からぬ座敷の中に、足を交へ肩を連ねて臥せしが、夜半の頃ありけむ予は夢さめて椽側に出でしに、折しも起き出でゝ庭にイみ居たる一人の老翁、こは武彦君の嚴父にや、遥かに南の方、天色の紅なるを指し予に向ひて、見られよ、彼處は鹿兒島なり、燒け殘りてありし家の、今日またも燃ゆるなりと語り聞かせられぬ、予はやがて内に入りしも、潺々たる細谷川の水の音に、こゝろ却て澄み、眠ふたゝび冴えて夢結びがたく、父やいかに母やいかにと見れば、今日の疲勞にいと熟睡しておはせば、相語らはむよしもなく、たゞ一人もの淋しく覺えつゝ、果ては老翁が指し教えし鹿兒

嶋を思ひ、音づれ絶えし家兄を思ひ、中別府の村盡處なる野の中の墓原に一人のこりし稚弟の今いかに淋しからむなど思ひいで、潜かに双の袂をかみて夜一夜泣き明したりき。

家姉は常に語りぬ、物に感じ易く涙もろきは予が家の遺傳性なりと、女子は兎も角、男子の涙脆きはど見苦しく厭はしきものはなしと、みづから知つて嗜まぬにはあらねど、先天の約束は如何ともなし難く、親同胞の中にても予は一入わけての泣虫なり、かもへば幼なき折よりの性癖にや。

夜は明けぬ、さても思はぬ厚誼に預かりしと、父母は感懇に白石一家の人々に謝し、いざ谷山の方に赴かむと立出でしが、途上に思ひがけなく吉井次郎助に行きあひぬ。

これは久しく江田の家に仕へし家來にして、維新戰爭の時には白川の役に戰沒せし喜平次君、このたび肥後に斃れし國道君に隨ひ、東奥州の果まで見て來たりしと、いつも一つ譚に、物語りぬる男、今日は儼然しく腰に一刀を佩びぬ、この戰爭に關係せしとも聞かざれば、伊達に差して昔を忍びしものならむ。

かねて谷山に立退きておはすと聞けど、たしかに樣子わからざりし江田の人々、きのふは何處何某の家にかはすかは明かならざりしを、次郎助は父が問はるゝまゝに詳しく語りしかば、都合よかりしと母も微笑れぬ。

かくて甲突川の上流、石井手の邊を渡り、幾度か坂を越え森を潜りて水上街道に出で、さらに横切りてきのふ合戰ありしとぞいふ武の岡の後を廻り、さて谷山の境に入り、夕暮ちかく字山田に辿りつきぬ。

きのふは谷山の方面にも戰爭ありしかど、鹿兒嶋ちかき涙

橋、柴原あたりのことにて此處とは一里餘り二里近くも隔りたれど、予等が過ぐる途すがらは、ことゝくその噂に埋もれぬ。

きはめて予を愛せし外祖母、母が兄なる外伯平藏君を初め江田の人々いづれも恙なく土隈の助右衛門として名を知られし百姓家に假の宿を定めはしき、たゞ戰爭の起りてより思はず東西に立別れて、吉野と谷山に立退きつゝ、絶えて音信を聞きも聞かれもせざりしを、けふ始めて相見しなりき。

江田の人々は予等の來れるを知り、みな門邊に立出でゝ喜び迎へられぬ、過ぐる頃までは三人なりし予が同胞の、今はたゞ二人となりて、予と弟のみ父母の後に隨ひたれば、目ざとき祖母君は先づ幼なき弟はと問ひかけられぬ、彼が病めるよしは豫て知られたれば、それぞと悟り給ひけむ、予が父母のいまだ何とも答へ給はぬうちに、問ひ重ねつゝ亡くやなりつらむと涙に暮れ給ひぬ、聞く人は更なり、父母も予等もまた一入新たなる涙を濺ぎぬ。

谷山に來てよりいつしか樂しき日を送りぬ、この頃には家兄の消息さらに聞えず、たゞ國道君が出陣せしと聞えしのみ私學校中にあつて夙に國道君の戰沒を傳え聞いたる古渡七之丞君は、斯と明かにいふに忍びずとて口を噤みしかば、すでに早く討死して現世の人ならざりし國道君も家兄も、この時までは尚いまだ愁歎の種子に上らざりしかど、此家に來ひし父母、外伯、外祖母、いづれを見てもおの〳〵心の中にいふ

べからざる苦痛を包みぬ。

予と弟とは此家に來りしより知れる人の多く、もの賑はしきのみか、近き邊には遊ぶに面白き小川もあれば心うれしさ言はむ方なく見るもの聞くもの何とやらむ面白く、日頃きはめて嚴正謹慎の人とて豫ては深く恐れ居たる外伯の何時に變りて親しく心切らしく覺えしも呵し。

江田の家は、外祖母、外伯の外、外伯の細君かね子の君、その兒女二人、および從兄國容君の若き妻ちか子の君などにても既にすくなからぬ人數に、更に予等の來り依りしかば、いと〻大勢の家族とありしが、こゝに又た母が妹にて後の年その夫君の任所伊豫の松山に沒せし叔母上八重子の君も男氏もろとも一子幸太郎を伴ひ、程遠からぬ所に假居し、予が祖父の妹にて父の叔母に當れる人の嫁して亡くなられし親族野崎氏の一家も、予が日毎に釣たれて遊びし川の邊にかり住してかはしき。

予は日毎に江田の僮僕三といへるを相手に川に釣して遊び暮しぬ、何の魚なりけむ能くは覺えねど、外伯が自から釣りて來りしものは自ら喰ふこそ美味かるべしと言はれし事など聽けの記憶にとゞまれば、夜ごとの膳に上りし川魚のうち一つ二つは予の獲物ありしならむ、あはれ思へば此處の假住居にありしは只わづかに數日の事なれど、その面白かりしこと、樂しかりしこと今も尙わすれず、兵火に混はれ鹿兒嶋を出でゝより、一方あらぬ變故にあひし身の、たま〳〵此處に逍遙ひ來り、珍らしくも落着きて遊び暮せしゆゑあらむ。

思ひ廻せば當時予を喜び愛したる外伯は、その翌年東京に身まかり、一人の孫のやうに予を愛したる外祖母も、予供の

交際に妙を得たりし若細君、ちか子の君も、今は早や世に亡き人の數に入りぬ、釣の友たりし三はその後暇もらひて歸りしまゝ絶えて消息を聞かねば如何にしてあるやらむ、鹿兒嶋より程遠からぬ谷山、予は去ぱ〳〵此處に遊びしかど、すでしく片寄りし山間の僻地なりしまゝ、ついにこの面白かりし山田の地を音づれし事なかりき、たゞ折々に當時を追想して、丘の下に立てる家、清き小川、茂れる森、さては日ごとに釣竿肩にゆきゝせし畦道なぞ、あり〳〵と眼に心に浮びいづるを覺ゆるのみ、

官軍は過ぐる日の戰爭に、殘れる諸所の私學校徒を追ひ拂ひ、鹿兒嶋ちかくは稍々靜まりぬ、されど何處にか影を潜めし私學校徒が何時引返して盛返すやら、殊に此處かしこに私學校徒の隱れ忍ぶものあらむと、日夜の詮議に吟味きびしく、谷山にも官軍よりの探偵いり込み來つて、さらに戰爭に關係なき無罪の人の、疑はれては拘留の禍厄にあふたる噂去きりに聞へぬ、予が父はもしや萬々一かゝる迷惑を蒙りては情けなし、いざさらば暫時遠方に此禍を避けて混雜の靜まるを待たむと、江田の人々が推しといむるを辭し、予が一家こぞりて加世田鄕野町といふに、因緣あるものを尋ねてこゝに暫らく月日を送りぬ、今より思へば、父母は外伯外祖母なぞの慈愛に任て、朝夕餘念なかりし予と弟とに異なり、いかにわけて親しき一家の如き姻族の間柄なりとも、廣くもあらぬ假住居に、かく親子四人の長く客待遇を受くることの氣の毒にも、

また自ら究屈にも思せしゆゑならむ。

頃しも夏の真盛、去ばしの別れを人々に告げ、まづ伊作と

いふを志して出づ、谷山より伊作までは行程五里、左して遠

けき路あらねど、伊作越とて名にし負ふ難所の山坂道、わけ

て此頃は打つゞく雨天に、溪の小川は溢れいでゝ道路との

外に悪しければ、予等の困難一方あらず、されど予は年も早

や十歳、身の程は年に比べて大なりしまゝ格別にいふこともな

なれど、弟はことしわづかに六歳のみ、しかしてや今日の暑

熱に當りけむ、下痢に悩める身の始終徒歩にて予と父母とに

隨ひしかば、幼なき足元の如何につらかりけむ、只あらぬ時

の事なりとはいへ實に哀れの極みなりき、はじめての路なれ

ば兎角に捗らぬ足を率きつゝ、早や今日の日の夏も暮れむ

とするころ、やう〳〵さすがたの伊作の里に着きぬ。

この日たゞ〳〵伊作越の半腹より相伴ひし一人の老翁、名

を日置七左衛門と呼び、こゝの郷士のよしなるが親切深き田

舎人の常として、父母の話相手となり何くれとなく物語りぬ、

伊作は予が舊藩の主君島津家累代の中に、一旦衰へかけし祖

業を恢復して、威名を九州に振ひ、戰國の歴史に墨くろ〴〵

と名をとゞめたる義弘公の誕生地、いでや其古蹟を案内しま

ねらせむといふ、朝より疲れし足の今となつていかで迂路に

運ばるべきと予は心に思ひしが老翁が折角のすゝめ默しがた

かりしか、たゞしは珍らしきまゝ一覽せばやと思し召してか、

父母は予等の手を引き老翁のゆくがまに〳〵歩まれぬ。

見渡せば天をも衝かむ大樹いやが上に生ひ茂れる藪に、今

は狐兎の栖家となりて此處に幾年をや經たりけむ、その蹟は

雜草人の長を凌ぎ、たゞ主公誕生の地と記せし木標一片のみ、

老翁は深き空堀の殘址を指しながら、物語りの一つ〳〵は今われられど、年少の頃より歴史を好める予は、さだめし足の疲勞を忘れしならむ、ことに封建時代、島津氏の臣と生れ君家を見るの感情おのづから異なれる父母は、はとむぞ一種の感慨にや打たれけむ。

伊作の里に着きぬ、名高き此處の温泉に畫間の疲勞を忘れ、夜は老翁が慇懃なる待遇に逢ひ、所柄とて、品は粗あれどゆかしき誠意こもれる薩麥がきの馳走をうけて眠りぬ、予はこの後今日のまでこの情ある一夜の主人に逢ふよしもなかりしが、母は曾て家姉もろとも後年この温泉に遊び、久し振に昔の物語りを繰返したりと、星霜幾年、情ぶかきこの老翁も今は此世にあらざるべし。

あはれ一夜の宿も値遇の縁、翌くる日は早く此家の人々に別を告げ、阿多田布施を經て、吹上げの砂漠を右方に、金峰山を左方に眺めつゝ行程三里、午前の中に志す加世田郷野町に入りぬ、尋ねゆきて宿りし因縁の家は山元といふ、主人の妻ある人、むかし久しく予が家に奉公して今も尚春秋の音信たえぬ優しのものゝ家なりき。

町は名の如く、もとより片田舎の野町なれど、この山元の家は營業はめて繁昌し、遐地には稀なる資産あり、主人の何某は商賣の駈引に拔目なく、腦動しづまるを待つて鹿兒嶋第一の市街に本店を設け、大阪神戸の間にかけて盛んに樟腦と砂糖とを送り出したりといふ、予が家と此家との關係は淺からぬ主從の中、ことに此ころは維新後の改革を去ること遠からで、武士を尊ぶの風いまだ少しも衰へぬ時なれば、山元の一家親族こも〳〵予等を特別の客人とし、朝に夕にお

よぶ限りの歡待いづれ忘れがたき一々なれど、わけて記すべきは老婦嘉代の事なり。

嘉代の予が家に奉公せしは、予が曾祖父が十二三歳の時御小姓として君側に仕へてより御側役の要職を務めて、六十餘歳、死に至るまで曾て一たびも主君の叱責を蒙らざりしと其頃藩中に語り傳えられし俊識君の世にありて、家運繁昌を極めし頃なりしが、父は祖父の早世に逢ひ、たゞちに曾祖父の後を嗣ぎて家督相續せしかば、その舊主として父を敬ふことと一方ならねど、その情は我が子にも似たるべく予等を見てはその孫とも思ひねたらむ、戰爭おはりし後、鹿兒嶋に來りて常に母と家姉とを慰めしも彼なり、予が初めて東京に出る時、予を戒めて花柳の巷に入るなと頭上に一針を打ちしも彼なり、あはれ家運繁昌なりし時代、曾祖父が手に濟ひし人は多かりしと聞くに、人情は紙よりも薄く、炎を去り涼に趨るの世上、いつしか知らぬ顔して見過すもの少なからぬ世に、むかし忘れぬ優しき振舞、あゝ今も尚この時の事を思へば、片田舎の嘉代といへる家來筋の婆々よりも、祖母に等しき慈愛の面形いつしか胸に映りぬ。

加世田は鹿兒島を去る十里ばかりの南方、日本建國の歴史に深き由緣の舊國阿多の一部なり、古史に記せる火降瓊命が天降りましませし、かの「カサヽギノサト」といへるは、此地の事なりといひ傳ふ。

予等は山元の家にあつて、氣樂なる御客人たりし一日のこ

と、予の部屋と定められし戸棚に、思ひもかけず日本地誌略全部を見出しぬ、こは予が小學校の教科書にして、去かも予が尤も嗜めるもの、いくたびか繰返して讀みつゝ、さながら花と見棄し雁がねの故郷の雛に泗へる心地、まことや本年六月、兵火に追はんて鹿兒島を出でしより、書物を手にしたるは實にこれが初めなりき。

ある日午睡の夢さめて起きいづれば、座に見馴れぬ人あり、いと打ちしめりて何をか父母に語り、父母の眉には哀傷の色迫りて見えしのみか、この頃えばし乾きし母上が瞼邊には時ならぬ涙の露やどりぬ、聞けば鹿兒島地方の戰爭一たび鎮まると共に、この春肥後に戰沒せし國道君の訃音たちまち其家に傳はり、外伯と外祖母とは東京に留守せる予が家姉母子を氣づかひ、俄かに東京に行かるゝことゝなり、その留守中の

萬事ことゞく母上にたのみ置たき迎ひとして、こゝに參上せりといふ使者の口上、あはれ幼弟を奪ひ去られて日數もいまだ多からず、吉野村の孤墳草やう〳〵に生ひむとす、かつは家兄の身の生死いまだ明かならねど大方は夫れぞと思はるゝに今はまた國道君の訃音あらたに聞えて、予が父母には唯一の娘たる家姉は二十二歳にして花なき寡婦の境涯に入り、父母が爲には掬頭の花ことしやう〳〵四歳の外孫は父なき孤兒となりぬ、老てもあらぬ父母の鬢髮、この一年に白うならむとせしも實に道理ぞかし。

母上は江田の使者もろとも鹿兒島に歸り給ひ、予は父と弟もろとも尚山元の家に殘りぬ、今より思へば二十餘年の夢、年久しくして出來事の多くは打忘れたれど、此家にありしうち、片浦といへる漁場に遊びて網引を見たること、毎日の膳

に上りし魚介のわけて美味なりしこと、すべて此邊は緬類を製造する土地とて家々にて長き竿頭に干しねたることゝ程遠からぬ所に村用の井戸ありて水汲に集まれる人聲の喧ましかりしこと、さては井戸のうちに數多の眞鯉、鯡鯉の群がりねて小兒心に捉へたかりしことなどは今も尙消えぬ記憶にとゞまりぬ。

今一つ覺ゆるはむかし母上の家に拳公せしころ筆と呼ばれしもの、今は此地に古着商を營めるが、その義子に佐太郎と予より二つ三つ年嵩の男兒と日毎に遊びねたるが、下賤の生れなりけむ、いつも予に與ふるを名目に、いつとよりか桃の實を盜み來りて、大なるを自己が懷中に捻じ込み、殘れる小さきものを撰りて予に分ちぬ、さても鄙恪の少年かなと予は其ころ獨り心に卑みねたるが、さても其後さる程に、今は

如何に成長せしぞ、もし相逢ふことあらば互ひに當時を語り合ふて一夜ゑみ〳〵笑ひ興せむものを。

かゝりしうちに私學校徒は遠く肥後日向を志して退き、鹿兒島の騷動も一先ゑづまりぬ、立退きし人々の中には歸り來つて家屋の新築にとりかゝりしもありと噂に聞えぬ、さらば予が一家も歸りゆくべし、いつまで山元の家を煩はさむも心苦しと、今度は川邊といへる道を傳ふて堂の尾阪を越え、谷山に出でゝ鹿兒島に辿りぬ、行程およそ十里、朝とく加世田を立ち、いまだ暮れざるうちに鹿兒島に入り下荒田なる江田の家を音づれぬ、過ぎし頃より此家におはせし母上はいつに錢らず笑顏もて予等を迎え給ひぬ。

この日、加世田より駄馬一匹を雇ひ、予と弟と相擁して跨がり、時には予のみ下りて歩みしが、父は始終徒歩して伴は

せ給ひぬ、予かつて旅に出で、山村水廊の間、親子づれの旅客に遇ふごとに忽ち今日の事を思ふ、明治二十三年の初歸省して故郷にあるの日、一たび川邊に遊びける時、去と〳〵とふる春雨を冒して又た此道を過りぬ、山の容、水の光、舊に依て舊の如く予を迎へしに、むかし堂の尾阪の茶店に憩ひ、こゝに午餉を去たゝめし事など懐ひ、亡き人々を忍びつゝ轉た悲哀の情に禁へざりき。

さてみれば此處も浮世や、千門萬戸たちならぶ軒、波うつ甍、きのふまでは九州隨一の城下たりし鹿兒島の市中いつしか修羅の巷となり、今日は昨日の面影おく、たゞ雉子なく燒野が原となり果てつゝ殘りし家はものゝ三十分一にも、足らずと聞く。

士族小路などには逸早く歸りし人ならむ燒け殘れる倉の庇さては門の側に小屋かけして住へるもあれば、あるは燒瓦を積みたてゝ小屋の搆をしたる、稀に燒け殘りし家に一家一門うち寄り集ひて住へるもあり、立退きし人のいまだ歸らざるもの多きまゝに、垣根やぶれてつくらふ人もなく、焦げし壁、燒けし瓦、ぶちかゝりて往來を鎖し、家ごとの庭には八重むぐらの露ふかし。

ことに到るところの燒跡には、蓬に似たる一種の草、茫々と生ひ茂りぬ、平生日頃あまりに見馴れず、名も知れぬ草の此時にのみ生ひし故にやあらむ、誰が名づけゝむ、いつしか鎮臺草と呼びけるもおかし、また此草とゝもに、いつ蒔きし

冬瓜の斯くは焼け跡に生ひ蔓りけむ、黄色の花を開き自己がまゝに早や大なる瓜となつて、のッそりと鬼瓦の側に横はれるが、時にとつて晩菜の料となつたる滑稽談もありし、さても容易に生えぬ種の、誰れ蒔きしともなく斯く成長せしは、いかにしても怪しく不思議の事なりける、たゞ思ふ、この瓜と、この草、いづれも灰と焦土とを好むものならむか。

故郷てゝと來て見れば、予が本立寺馬場の家は焼け失せて跡なく、近隣にて東の伊集院氏、西の内田氏、いづれも其屋敷内なる焼残りの建家を假の宿と定め、繋がる線の永田氏も主人休之丞君が手工に長せるまゝ自ら小屋掛をなしつゝあり、さてまた下荒田の江田の家はと聞くに、廣袤およそ二千坪の一摶、運よくも近き邊の一二軒と共に焼け残りたれど、雜火に用ゐしやらむ、戸障子をはじめ壁板など取り外し、皆いづ

くへか運び去られて、わづかに柱と屋根のみとなり、さながら家屋の骸骨ともいはむ有様に、とても再び住居とはなし難きも、同じ屋敷内の別宅は無難に取殘されしまゝ、兎も角も江田の人々さては予が一家も、こゝを暫時の住居と定めぬ。

てゝに移りて幾日の事なりけむ、江田の外伯と外祖母とは後事を母上に頼み、東京に赴かむとていはるゝやう、御身等が本立寺馬場の屋敷は焼け失せぬ、願ふは一家こぞりて留守されたしと、去みゝ説かれたれど、いかに荒果し跡とはいへ、住み馴れし家園のいとゝ懐かしく、まして江田の家は外に留守もる人のなきにあらねば、予が一家は江田の家にて五六日の夢を結びしのみ、やがて混雜の最中、鹿児島にては俄かに人手を頼みがたきまゝ、さきに立退きたる吉野村の中別府より村人を雇ひ來りて、予が家の焼け跡に、いそぎ一軒の

堀立小屋を營み、やう〳〵に歸り住むことゝなりぬ。

ことし六月のはじめ、兵火に追はれて此處を立退きしより三月、旅寢の夢どこやらに結びがたかりけむ、小兒心にも油斷せざりしものを、今こゝに假令むかしの姿あしとはいへ、いぶせきこの小屋を、今日より予が家ぞと思へば、何とやらむ、草深き片里山より花の都に歸り來りし心地、この嬉しさを何に譬へむ、

予が家はかゝるさまにて、間に合ひの堀立小屋の下に暮すことゝなりぬ、もとより一時の假の宿、ながく住まむと思ひしにあらねば、丸木の柱、茅葺の屋根、畏こけれども傳え聞く隱岐にありてふ黑木の御所を忍びて移り住みしが、この月の末、薩南地方の名物なる暴風雨に逢ひ、あはや倒れむとして僅かに其難を免がれしも、軒かたぶき柱ゆがみて、たゞこれ雨露を凌ぐに足れるのみ、されど維新改革の波瀾に捲きくづされて一旦衰へし予が家園は、この年の騷亂によりてますます逼迫し、戰爭ははりても直ちに新らしく營むの運びに到らず、かくて予が一家はこの堀立小屋に二年の春と秋とを迎えて、予が父は終に此家に逝きたまひぬ、あはれ當時の事は深く予が心を動かしけむ、いつとても大廈高樓の美むべき夢を忘れて、このいぶせく見苦しき茅屋の朝夕いかに樂しかりしかを思ひ起さしむ、げに思へば竹の柱に茅の屋根、手鍋さげての快樂は、男女が中の戀のみには限らざりけり。

梧桐の一葉おのづから風かき空に舞ふて、漸く秋の哀れを知

るべき八月の末つかたより、誰いふとなく私學校徒は波濤の如く引返し來りて官軍が占領せる鹿兒嶋を回復せむの勢ひあり、さては此處も再び戰場となるべしとの風説いたる處に聞えぬ、されど昨の日けふ日向の永井村に取圍まれて孤城落日の私學校兵いかにして歸り來るぞ、まして名に負ふ可愛岳の難所をいかにして斫りやぶるぞ、よしやこの重圍を脱け出で此の難所を斫り破りても鹿兒嶋までは行程四五十里、私學校徒いかに勇猛ありとも、身は金鐵にあらじ、よもや歸り來るまじなど仔細めかして語るもあり、この後いかになるやらむと思ふうち、歸り來るべしとの風聞まことゝなり、私學校徒は永井村の重圍を斫りぬけて逃げ去つたりと洩れ聞えぬ。

かねて鹿兒島を守れる官軍は、兵數少くして所詮途中に拒ぎといむること叶はざりけむ、舊城および私學校と練兵場を

隔てゝ相對せる所に、米倉金倉として舊藩の時の倉庫なりける邊より肝付屋敷といへる家をも取り拂へて砦とし、市中の一部を占有して海上の海軍と連絡を通じ、防禦の用意ふさ〳〵油斷なき姿に、やう〳〵近ごろ片田舍より歸り來りて假に住居を建てたるもの、さては氣早く新築に取掛りし市中の人々は、また俄かに騒ぎ立ちて家財道具を取片付け、思ひ〳〵に立退くもあり、たゝ山手の方に住みて危險のうれひなき人々は、大方ふみとゝまり飛びくる砲丸銃丸を防がむため、庭先に横穴空堀をはりて萬一に備へぬ、予が家の近傍にて予等と同じく立退かざりしは分家の伊集院一家と永田氏の一家、さては西隣の内田氏とのみ、内田氏は主人父子ともにおはさで婦人ばかりの心細さに尚立退かず、屋敷内なる低き所に横穴を掘り、はじめ一日二日は此處に隱れておはしき。

折しも官軍の龍驤艦、昨夜の暴風雨に吹かれて祇園洲の濱に打ち上げられたりと聞き、いそぎ馳せゆけば、昨日まで烟を吐き涙を賦りつゝ勇ましく沖路はるかに往來したる家屋大の軍艦は、たゞ見る稻荷川の裾に打あげられつゝ岸より三町ばかり隔てゝ座りゐたり、あはれ私學校兵歸り來らば忽ち奪ひとられむと思はれしに、流石に儼として城の如き軍艦、座りながら巧みに拒ぎて、私學校徒の手に落ちざりき、さてもこの日この時、この難にあひし船中の人々、さだめて苦心のあまりに或は深く決する所ありしあらむ。

予が屋敷より二三町の東方、諏訪の馬場は吉野吉田へ通じ

磯の濱に出づるの別道にて、きのふけふ立退く人の路筋に當りぬ、一日予はこの街道の傍に立たせ給ふ諏訪宮ある大鳥居の傍にイみつゝ、織るが如き往來を望みて、あはれ予が一家もかつて此處を落ちたりけりと、小兒心にも過ぎし昨の日のつらかりしこと、恐ろしかりしことなど思ひ出せる折しも、見るさへ懷かしき十字の紋をつけたる羽織に袴を穿ち、結髮の供衆五六人に前後左右を護らせし一挺の乘輿は、予が立てる大鳥居の傍、いぶせき茶店の前に暫し留まりしが、やがて供人は往來の袖を扣え、何をか問き合せては、輿中の人に言上せるさま稽て母より寐物語りに聞いたるありし昔を今眼前に見し心地、やがて供人は茶店に立寄り、鹿兒島にては高洲芋と稱へ早熟を喜ばるゝ甘藷の新たにふかして湯氣の蒸々たりけるを購ひ、懷紙に載せて悲しく興中の人に捧ぐるを見たり

き、吹く風の旗をまかねば興中の人の面影は予ついに見るを得ざりしが、傍にありし物識らしき人に問へば、舟たかゞと遜めかしていふ、あの君こそは名聲一世に高く威望朝野に振ひし前の左大臣正二位島津久光公、今日しも玉里の御屋形を立退かせ給ひ、磯の濱なる御子息忠義公の御屋敷に赴かせらるゝなりと、あはれ野人店頭の一物、はからず公侯の賞美にあづからむとは。

予は思はず興の行衛を見送りぬ、折から東北の方に雷鳴にやと思はるゝ一種の響殷々くと起り、あがく引きつゝ遠く響くを聞きぬ、傍の物識先生、予に向ひていふ、これ戰爭の音なり凡そ遠く隔てゝ戰爭を聞くときは、敵味方の銃聲ひとつになりて遠雷の如くなるものなりと、實にこの物識先生が言葉に違はず、この時はこれ鹿兒嶋を距る十里許、大隅國横川地方の砲聲銃聲が風のまに〳〵到れるなりき

つぎの日、一道の鯨波の聲城山に起りて予が耳を驚かしぬ、つゞいて小銃のひゞき俄かに烈しく、さては沖ある軍艦よりは砲門を開いて陸上を攻撃したれば、鹿兒嶋市は二たび火船の中に包まれぬ、こは昨日横川地方に健鬪せし私學校徒の先軍が馳せ返りて米倉金倉の官軍を追ひ拂はむと、こゝに一激戰を試むるなりき、きのふ十里の外にあつて今またこゝに戰ふ、その疲戰疾驅の狀かもひやるべし、さればこそ十重二十重に圍まれて如何なる妙算神謀も、施すによしなしと、敵に味方に信ぜられし永井村を斫りぬけ、去かも四五十里の長程に息をもつがず、わづか四日に馳せつけたる剛膽と勇氣は、今も尚明治十年戰爭中の一偉談として、聽く人、見る人に舌を卷かしぬ。

この日午後、私學校徒は前後相つぎて歸り來りぬ、予が家の近傍なる一つ橋の田中氏、諏訪の馬場の大野氏などに、假の陣營は設けられつゝ、西郷先生をはじめ重立てる人々も此處にはせしが、防禦のたよりあしかりけむ、いつしか城山に引揚げぬ。

今回かへり來りし私學校徒の員數かよそ幾何ありしか、知らず、或は千五百人に餘るといひ、或は只の五百人にも足らざるべしと稱へしが、城山沒落の砌ありし死骸と生捕られし人々など思ひ合せて大凡は七八百人、よも千人には越えざりしならむ、中には途中より脱せ加はりしもあらむ、また手を負ふて鹿兒島に歸り心ならずも一旦官軍に歸順し再び出でゝ加はりたるもあらむ、されど其多數は肥後と日向の間に難戰苦闘の數を重ね、終始相離れず、果ては可愛岳の重圍を斫りや

ぶり孤軍長駈して四五十里の行途を只一瞬にかけ來りし精鋭無比の面々にして、連日睡らず、連日食はず、去かもゆく〳〵敵を駈け惱しての苦戰、その困苦のさま、思ひやるだに涙の種なり。

聞く、私學校徒は身に纏へる戎服も寸斷となりて海布の如く、もてる什器も腰に佩びたる一刀も幾何の苦戰に滿足なるは稀なりしが、天生の勇氣のみは少しも最初に違はず、わけて眞先に歸り來りし人々は猛虎の荒れたるが如く、手に〳〵白刃を提げて足並は宛がら飛ぶに等しかりしと、さもあらむ。

さても此時に方り米倉金倉の間に立籠りし官軍はたゞ、少數の陸軍、及び警視隊に海軍の陸戰隊を加へしものゝみなれど、その多くは是また薩摩人にて、朋友親族たがひに敵味方と別れつゝ生死をかのが故郷の地に爭ふ、さだめし一種かぎ

りなきの感慨に迫りしならむ、さればにや私學校徒の一隊、疾風の如く歸り來つて先づこの米倉金倉の官兵を追ひ攘はむとせしも、勇武の譽れいづれ劣らぬ敵味方、こゝを先途と防ぎしまゝ流石の私學校徒も攻め落す能はず、點々として蜂の巣の如き彈痕を、この倉の壁と私學校の石垣とに殘して、當年の紀念をとゞめぬ。

さてまた多賀山に上りし一隊は、祇園洲濱に座れる龍驤艦に向つて攻撃せしも、其甲斐なかりしのみか、艦中の人を苦しましむるにも足らざりけむ、艦中よりは頻りに發砲して永安橋附近は人の近づくことも叶はざりしと、かく私學校兵がその勇氣と膽略とをもて、いふにも足らざる少數の官軍が守れる米倉金倉を攻めて取ること能はず、風に破れし龍驤艦さへ苦しむること能はざりしは、官軍の防禦その宜しきに適ひ

しに相違あかるべけれど、大方はこれを攻撃するに必要なる大砲のなかりしゆゑならむ。當時私學校徒の方には兵器彈藥すでに全く盡きて、一發の彈丸さながら連城の璧に等しく珍重せしと聞く、されば幾多の私學校徒が永井村の重圍を斫りやぶりて鹿兒嶋に馳せ歸り、更に城山に立籠りて、尚よく數週の籠城を遂げしものは、實にこれ拔けば玉ちる腰間三尺の秋水と艷れて已むの精神ありしのみ。

もとより噂は聞えたれど、さまで急ぐに及ばじなど、おちつきし人々を驚かして私學校徒は疾風の如く歸り來りぬ、すはといふまもあらばこそ、早くすでに戰場となつたりければ、

遁げ後れし人々の周章狼狽一方ならず、戰鬪はげしかりし米倉金倉の近くより私學校邊にかけて住へる人々の中には膳に向ひし箸なげすてゝ逃げ出せしもあり、また丸裸のまゝ湯屋の軒より落ちのびしもありといへば、大概の有樣は推しはかるに足りぬべし、突然に驚かされて狼狽へ騷ぎしは、ひとり逃げかくれし市民のみにあらず、官兵、巡査などの中にも斯る人すくなからず、果ては私學校徒に出あひて研られしものもあり、普通の文官、或は眞宗の僧侶などにて非命の最後を遂げしも多く、幾多の死骸は算を亂して、こゝかしこに横はり、血は流れて市街を染め、腥き風は巷間に滿つ、鹿兒島の人は今も尚「二度やぶれ」と唱へて、時に夜話の席上に一種の花を飾るは當日の慘狀を物語るなりけり。

予等は夏よりこのかたの經驗もあり、例の堀立小屋にあるも危ふからねば餘所に立退きもせざりしが、この日より翌日の夕方まで、さながら亂戰の樣にて、何處よりとも知れぬ銃丸砲丸をり〳〵に飛び來れば、むかし曾て水を取らむとて丘の下を穿ちて其甲斐なかりしまゝ打ち捨てありし土窖のうちに暮しつゝ、銃砲の聲の斷へしを待ちつゝ出でゝ樣子を伺へり、外れ彈に討たるゝの心配は却て小銃の方に多しと聞けど、さば〳〵聞き馴れたる故にや、耳を掠めて飛び過ぐるも驚かねど、いつもながら恐ろしく凄まじく思はれしは大砲の音なり、その烈しき響をなして飛び來りつゝ爆然として破裂する時は、山も丘も崩るゝ許りにて、よし二三町を隔てしものもなほ足下におちし心地す、ことに私學校徒の一隊が祇園洲濱の淺洲に横はれる龍驤艦を攻撃せむと試みし多賀山は、予が屋敷の東南五六町にあり、されば沖なる軍艦が釣瓶うちに放

ちし筒、先は恰も予が家ちかくなりしかば、落ち來りて破裂せし彈丸も數すくなからず、西どおりなる内田氏の妻女が子息の許嫁と共に、砲聲の途絶えしまゝ、折から荒れ果てゝ有るかなきかの樣ある垣根を越え、予が家の庭ちかくをそゝろあるきてゐられしが、一發の砲丸といろき來り、去かも間近に破裂せしかば覺えずも予等の隱れ家なる土窖さして駈け込まれし事もありき。

米倉金倉にての戰は少時にして熄みぬ、されど砲聲銃聲は絶えず此處かしこに聞え、火の手は幾十個處より揚りぬ、てとし夏のはじめ一たび燒け失せて、きのふけふ漸く假普請も濟ませ稍々市街らしくなりし鹿兒島は、あはれまた一面の燒野が原となり了んぬ。

私學校徒は兵器乏しくて終に米倉金倉の官軍を追ひ攘ふて

と叫はず、官軍も亦こゝを必死と守りて只管防禦しつゝ後詰の兵を待ち居るに過ぎず、果ては二日一夜の激戰に鹿兒嶋の大部は、官軍の手より私學校徒に引渡されぬ。

二日一夜の激戰首尾よく故郷の鹿兒嶋、その大部分を取戻しぬ、久しく官軍に占領されし故郷の空も今はとり返されぬ、これぞ私學校徒にとつて、せめてもの滿悦なりき。

予が郷黨の先輩阿多宗五郎君は、かつて職を陸軍に奉じ、邊見十郎太とは位置も下らぬ同僚ありしが、廟堂の風雲あれて征韓論やぶれ、西郷先生袖を拂つて故郷の空を指させし時、其まゝ從ふて歸り來りしよりは、鋤と鍬とを握つて背門の南

畝に耕すうち、本年の春、私學校徒に推されて一隊の長となり、肥後路より日向路にかけて轉戰せしも、運つよふして身にすこしの恙もなく、今度も衆と共に馳歸りしが、けふ米倉金倉の戰に、折しも敵の軍艦よりうちし砲丸に双の大腿骨を碎かれ、私學校の門前に、生けるといふは名のみに倒れねたるを、つき從ひし軍夫の一人、健氣にも有りあふ戸板に抱き上げつゝ、そのころ厩舎の馬場なる五代氏に同居せる其細君の許に送り屆けぬ、この春に相別れてより絶えて見ざりし其人が、助かるまじき深手を負ふて俄かに歸り來りしを見し時は、いかに驚きけむ、されど女なからも、年月この人に連添ひ來りし女、かくても更に狼狽えし姿なく、靜に創口を洗ひ、殘る方なき手當も其甲斐なく、迚もとりとむべき術にはあらざりけむ、宗五郎君はこの最愛の人に介抱されしを知るよし

もなく、忽ち息たえぬ、かくて假に五代氏の屋敷内に埋められしも、さらに本立寺馬場なる自宅の燒け跡に葬られ、後さらに又た淨光明寺岡なる西郷先生の墓側に移されぬ、あはれ千軍萬馬を往來して今日ふるさとに生ら え來つ、たゞ一旅を負ふて因縁も淺からぬ私學校の門際に倒れ、去かも久しく相逢はざりし女に介抱され、我が住みし屋敷の内に葬られしは、かつて例すくなき譚柄なりける。

こゝに予がために一人の叔父靜吉君は、この夜二人の兵士を伴ひ、繁がる緑の伊集院早太郎君を訪ひ、手にしたる一羽の家鶏を投げ出し、おのが好める薩摩汁をと頼み、久し振の美味さても有難し忝しと幾度か謝しつゝ、永き訣別を序べて城山に入りぬ、身には肌うすき一枚の單衣を纏ひ、腰に一刀を佩びしのみ、その外には何處に得たりけむ赤き毛布を携え

しは、冷氣を凌ぐ夜の衾ならむ、みれば僅少の月日に見かはすばかり色まッ黑々の面影となりて骨のみ高く目のみ窪める樣、いかに久しく風雨に暴され山野を駈け廻りて備さに難苦を嘗めしやら、思ひやるにも餘りありしと、こは夜ふけて後のこと、さかも火急の折柄、早太郎君の家にても、すこし隔りし予が屋敷まで告げ知らすべき暇なかりけむ、この時相見ざりしまゝ予が一家は終にこの叔父の白骨すら見ることは叶はすなりぬ、後日この夜のあらましを聞き傳えし父は、薄き兄弟の緣なりしと殘り惜しげに宣ひしも道理、彼の外には只一人の同胞もあかりければ。

阿多宗五郎君が珍らしき最期を遂げしも、予が叔父靜吉君が數碗の薩摩汁を傾けしも、皆これ鹿兒島の大部分が私學校徒の手にありし一日一夜の事なりき、

わづかに日一日、夜一夜のことなれど、ものゝ哀れをとゝめしは宗五郎君のみにあらず、叔父君のみにあらず、こゝに家鴨の馬場なる松岡氏の兄弟四人、さきに軍に從ひ肥後に戰ひふて三人すでに戰死し、長兄一人重創を養ふて家にありしが、この日私學校徒の歸り來りしを聞くや否や、其まゝ身を躍らして馳せ出でむとせしを、老いたる父は袖びきとめ愀然として、汝等同胞四人のうち、三人すでに身を西鄕先生に致しぬ、殘る汝も亦その重手を負へり、これ再び出でゝ軍に加はらすとて、義において違ふことあるまじければ、年老いて餘命覺束なき我がために、せめて汝一人は踏止まりて生き長らふ

べしと、道理せめて哀れの言葉を何とや聞きけむ、暫し差俯いて無言の涙を含みしが、またもや耳を劈く砲聲に我を忘れて、父が止むる袖を拂ふが否、疾風の如く駈出でゝ竟に歸らず、

あはれは是れのみにとゞまらず、城が谷なる大迫德次郎、年はじめて十六、この春同年の從兄弟あにがしと相伴ふて戰場に向ひ、一人は肥後に討死し、自己は疵をつゝみて家にありしが、この日また馳せいでむとするを、母氏と姉妹とは、この儘かくてあるも更に武士の面目に缺くる所はなかるべし、手を負ひし身の再び死地に赴く用なしと、前後左右より袖袂を取りて頸りに留めしが、いつしか家人の油斷を伺ひ、その夜秘藏の一刀を携えしまゝ、裏口より脫けいで終に城山に無慘の最期を遂げぬ。

こゝに兄弟四人、その名ひとしく私學校に重く、果は同胞同心おなじ枕に討死とげし村田三介君の弟に、高城十次君といふは、かつて宮廷に仕へて侍從の職を辱ふしたるが、私學校徒の面々もろとも、鹿兒島を引揚げて城山に立籠る途すがら、後迫なる自己が門前を過りつゝ、もはや生きて還るまじといふと、かねて覺悟やしたりけむ、妻は直ちに綠の黑髮を斷ち、二人の小兒もろとも門前より、瓦人の後姿を見送りしと、あゝ聞くも哀れ、語るも哀れ、いづれ一場の悲劇なりける。

頃は露けき秋、たゞさへ濕るゝ袖袂、いかにせよとか降るは涙の雨やさめ。

月の色もいつしか秋となりぬ、風のおと、虫の音、露の珠玉、そゝろに往時をのばるゝ朝夕、戈を枕に夢やすからぬ昨日ふ、出づるに途なく引包まれし城山の秋、さても如何なりけむ。

沒落に先だつ四五日前と聞く、桐野の利秋は從僕一人と共に密かに圍をぬけ出で、時しも寅家に立退きし家人を音づれ、親しく永き訣別を告げつゝ、身に帶びし金子を送り、曉方かけて引歸したりと、いかに慓悍なりしとはいへ、いかに勇猛なりしとはいへ、當時蟻一匹這ひ出る隙もあきまで、十重二十重に圍まれし城山を、さても如何にして從僕もろとも脫け出でけむ、この僕は維新戰爭の時より彼に昵近せしもの、生國は京都のものなりしが、何とかしけむ非常に彼に愛せられ、ついに彼が舊姓中村を名乘り、今度朝夕彼の座側を離れず、

の事起りても、進退を共にし、はては自己の生命を捨てゝ、主の最期に伴ひしとかや。

當時私學校徒の中にあつて今もなほ生き殘れる人々のうちには、曾て其首領と仰ぎし桐野が城山の沒落眞際にこの擧動ありしは、妻子に後髮を曳かれし界怯未練の振舞、武士の恥づべき所業なりとし務めて蔽ひかくさんとす、軍陣にある身とはいへ、一度妻子を顧みしとて固より武士の面目に恥づる所はあかるべきに。

おもふに彼は、生れて人一倍に涙もろく情に厚かりけむ、その大敵を眼前に扣え、去かも死期の當さに近づけるを知りつゝ、なほ閨夜に乘じて圍みを衝き、面あたり永訣を序する情緒に到りては、正に是れ千古に傳えて、つゆさらく恥かしからぬ日本武士の風流といふべし、

さても私學校徒が鹿兒島に入りし時、おの〳〵其家に歸りて久しく逢はざりし父母にも見へ、妻子にも逢ふの暇はありしならむに、多くは我が家の近傍を往來しながら絶て振り向もせず過ぎゆきしとぞ聞く、中には軍務に忙がしきもありしならむ、家族の行衛わからざりしもありしならむ、されど軍にありて家を省みるは武士道に欠くるの振舞なりと思へる一種の風習ありしためか、叔父都吉君の如きも自己が家には入らずして伊集院の門を叩きぬ、たゞ高礒十次君がその家に立寄りしは例すくなき談話なれど、これもたま〳〵我が門前を通りかゝりしまゝの事にて、もとより態と道を求めて立寄りしにはあらざりき。

出陣の水盃とりかはして一たび家門を出でたり、いかで生きて我家の軒を見るべきと、蓋ひし一旦の覺悟を胸にたゝみし私學校徒の面々が、この時に及びてもおの〳〵我門を叩き妻子を顧るを厭しとせざりしは、いかに其氣慨の最後まで義へざりしかを知るに足りなむ、かの手を負ふて家に疵を發ふもの、さては事情あつて心ならずも官軍となつたるもの、または隱れ忍びてありしもの、まで、西郷先生歸り來ませり、私學校兵また現はれたりと聞くや否や、膳に向ひし箸を措き、病に臥したる枕を蹴り、手にしたる鍬なげ捨て、其まゝの一文字に馳せ出でゝ加はりしは何たる勇俠ぞ、傳え聞く、エルバ嶋を逃れしナポレオンの馬前に馳け集まりし殘卒は、大將の好運をたのむこと尚ふかく、更に一たびウヂトルローの大決戰を試むるの望みもありしかど、今こゝに永非村の圍みを破り、天下の大兵に追はれつゝ、わづかに身を以て故山に歸り來りし私學校徒の希望は只これ城山の露と共に消えゆく一

事あるのみ、それと知りつゝ馳せ加はり枕をならべて最後を遂げし氣概に至りては、むかし元龜天正の間に名を得し一騎當千の武者と、いづれか骨の芳ばしきぞ、これを日本武士が傳へし精華の最後といふべし。

私學校徒は鹿兒嶋を取戻してより僅かに一日一夜、官兵の大軍また既に襲ひ來らんと聞きぬ、さては此まゝ此處に防ぐは便利あしかりなむと、明くるを待ちて皆ことゞく城山に引上げたれば、一たび其手に入りし鹿兒嶋はてゝに再び官軍の手に渡りぬ。

多賀山の頂上にのぼりゆくは龍驤艦より上陸せし海軍の將校あらむ、吉野村の方より高く行進喇叭の聞ゆるは陸軍の一隊ならむ、見る〳〵市中に兵士の山を築きぬ、さしづめ宿るべき家なかりけむ、予が茅屋の更らに狹きをも厭はで一宿をたのみし官兵五六人、いづくの聯隊なりしか、今は覺えねど規律たゞしく、去かも温順に、その立際には慇懃なる一禮の べて何處へか立ち去りぬ、この夜同じく分家の早太郎君が家に泊りし一組は、肥後にてありし戰爭を物語りつゝ、いたく國道君の陣沒を惜みしとぞ、つゞいく縁者の一門と知つてか、知らずか、やさしく去はらしき振舞、いづれの隊の兵士なりけむ。

官兵は市中より近在かけて要所〳〵を固めぬ、いざゝらば引包むで蟻一匹も洩さじと、時しも九月三日、四方より城山を圍みぬ、さて後は戰爭といふはどの事なく、銃聲砲聲は絶

間なく聞えたれど、多くは官軍より打出せしものゝみ、予が屋敷は市中とはいへ山手に近ければ、やゝ危険ならず、設けの土窖に隠るゝの心配もなく、例の堀立小屋のうちに夢やすらかに起臥せしが、折には雨か霰か、思ひも染めぬ流丸ヒューと音して飛びくる事もありき。

ある日、家弟は家の外なる厠より出できたりて、只今一個の流丸、厠の柱に中りしといふ、ゆきて見れば偖も危ふかりし、躍りねし家弟の頭上を、わづかに二尺ばかり隔てゝ傍の柱を物の見事に打貫きねたり、されど此頃の事なれば老たるも幼きも戰場に馴れて驚きもせず、聞きし予は固より他人に咄したりとて珍らしと思ふはなかりしならむ、予等も最初のはじめこそ恐ろしくも思ひたれ、いつしか馴れては劍戟の光も目に恐ろしからず、銃砲の聲も耳に恐ろしからず、稀に飛び

くる流丸、時に耳を掠めて過るも何處に落ちけむと見やるばかりになりぬ、予等のごとき幼童すら馴れてはかくの通り、ましてや幾度か戰場を經來りし猛將勇卒が、大筒小筒雨や霰とたばしる中に、悠々として談笑自若たりしとの物語かもひやるにも難からじ、凡てとはいはれねど予が思ふ處によれば、軍陣に臨める人に勇怯の差別あるは、馴れしと馴れざるとに因るにやあらむ。

私學校徒一たび引揚げて城山に籠りしよりは出でゝ戰はむともせず、寄手の官軍は、さす敵の嘴やと思へば用心いと嚴しく守りねたる一夜、いづくより來りけむ、總勢わづかに

二十餘人、わけて用心きびしき米倉金倉の陣を目掛けて不意に押し寄せ來りぬ、もとより油斷なき官軍は、すわといふ間もなく四方八面より追とり卷きつゝ夜目にも云るき一人の首領を、みごと銃槍に突殺しぬ、曉方の空はれて其首級を見るに、あゝこれぞ薩南に聞へたる名物男の一人、貴嶋清が變り果てたる面影なりき。

さきに私學校徒の勢力三州を蔽ひて、草も木も靡かぬものゝあかりし頃には、別に見る所ありとて反對の顏色みえしのみか、云かも其威風堂々くと兵を擧げて鹿兒嶋を立出でし時にも、あは冷然として傍觀したる貴嶋清が、きのふけふ私學校徒云きりに破れて、もはや行末の希望も絶へ果てたる折しも、いまは座視すべきの秋にあらずとて、おのれに身を許したる二十餘人の死士を提げ、闇に乘じて最も堅軍と聞へたる金倉米倉の官兵を襲ひ、竟に名も得云れぬ一兵卒の銃槍にかゝりて最後を遂げし心中、殆ど鬼神を泣かしむるの概ありといふべし。

さて後は官軍も大事をとりて更らに肉薄吶喊するの姿なく、たゞ遠卷に取圍みて、日毎に軍艦より、陸上より、こも〳〵砲擊を試みしのみ、當時陸軍の用ゐしは、鹿兒嶋人が「ボンベン」と稱せし、かの所謂る臼砲にて、かつて一たび九段の遊就館に陳列されしも、今は砲兵の手に用ゐられずと聞けば、むかしく廢器とありしならむ。

思ひ出せば、予は其ころ築地の行屋橋に遊び、折しも官兵

がこの日砲を備へ、遥かの城山を望みて射撃せしを見たりき晴天一碧ぬぐふが如き秋の空に、一團の白烟まづ顯はれ、次第〳〵に薄く大きく、果てはその響の聞え來し頃、消え失するはこの時砲丸の空中に破裂せるならむ、夜目にこれを望めば、火玉の如き赤きもの蜿蜒と鍋づる形を描きつゝ城山さして飛びゆくさま、まことに一種の奇觀なりき。

日數經るまゝに、官軍は陸より海より鹿兒嶋さして亂れ入りぬ、つき從ふ軍屬軍吏その數すべて幾萬、されば鹿兒嶋の市中、かしこに將校下士卒の宿營あれば、こゝに炊事場あり、ことに此頃は大阪神戸長崎などの通路も開けしまゝ、駐在の

兵隊、碇泊の軍艦を目的に抜目なき商人が、假普請して日用品を商ふあり、夜は篝火に閃を照して燒野が原も市場の如く賑ひぬ、予が屋敷に近き二王堂水のあたりより戸柱橋の橋際かけて、燒け失せし屋敷跡には、數多の人夫小屋その棟を並べぬ、予等日ごとに遊びては暮すうち、幼心にも哀れ厭はしと思ひしは、この小屋の中が、やがて物の八分まで賭場となりし事なり、もとより生命去らずの戰場に軍夫となつて入り込み來りしものが、人なみ〳〵の物事を辨え、浮世の禮義をも知るべき筈はあけれど、わけてもなさけなきは其身戰場にあるを忘れて、身も心も、果ては懷中の金まで袁産道に打ち込む奴輩の多き事なり。

一日いづこにて討たれし人の死骸なるらむ、荷ぎ來りし二人の人夫あり、兎ある人夫小屋の前を過ぎんとて、その中を

伺ひ、何おもひけむ忽ち歩をといめ、荷ぎ來りし死骸を小屋の傍に捨て置きつゝ、いそぎ走せ入りて其群に加はり勝負に餘念なかりしが、やがて取締にやあらむ、この樣を見て痛く叱責したりき、あはれ死骸となりしこの人の故郷には、定めて連添ふ妻もあらむ、可愛の子もあらむ、戰場の禮は、むなしき屍骸を只すみやかに埋葬するにありとぞ聞くに。

その頃の予等いつしか處々に宿營の兵士とも心易くなりぬ、わけて予等群童に向ひて、いとも親切に何處やらなつかしかりしは三角身の小劍を佩びたる青年の一隊なりき、後日軍に從ひし人に聞けば、これぞ新選旅團の中にありし教導團の生徒にして、微樂されたる尋常一般の兵士にはあらざりき、予等が毎日の遊戯は、隊を組みて兵士の營を訪問するか、たゝしは海濱に石を拾ふて軍艦の盛容を眺むるにあり、けだし薩廢の地、三方に海を扣えし半島國なれば、こゝに生れ此處に育ちし少年が、いづれも軍艦好きとなりしは、そもそも土地自然に其氣風を養成されしものならむ、されば其多數に洩れぬ當時の予は、さぞ祇園洲の濱邊に遊び、芝生の上に座しつゝ、いさましく波濤を蹴りゆく艦隊を望み、時には沖路はる〳〵風がもてくる音樂のひゞきに耳を澄まして思はず夕日に驚かされしも幾度か、予が歐洲音樂を好むの情癖は、そも此時より萌し始めけむ。

城山といへば何とやらむ高く峻しく、かつは拒ぎ守るに便り多き要害らしく聞ゆれど、もとより蔓爾たる小丘に過ぎず、ましてや昨日けふは兵器すでに全く盡き、糧食また乏しく、わづかに粥を啜りて其日の生命を保てるのみ。

されば押し寄せし官兵すこしく力を致して攻めむには容易く落つべかりしに、薩南の健兒、一騎當千の精鋭こゝを墓場と思ひ極めて立籠れる勢ひの如何に侮りがたくやありけむ、俄かに攻めもよらず、たゝ遠巻に透間もなく堤をつなぎ矢來を結ひ廻らし、地には滿面に釘うちつけし板をしきつめ、たゝ斫り込まれざらむ用心日夜嚴重あり、かくては私學校兵いかに精悍なるも爭で成すべきの術あらむ、車轍の劍、籠中の鳥、運命すでに窮まりぬ、山を拔くの力、一世を蓋ふの勇氣も

將た何かせむ。

今にして思ふ、當時私學校徒の面々一たび回天の志を抱き、戈を枕に國を出でしより硝烟彈雨のうちに暴露することゝ二百餘日、祈りし弓矢八幡に見放されてか、武運つたなく戰ふごとに利を失ひ、孤軍健鬪して永井村の重圍を斫りぬけ、やう〳〵歸り來りし故郷は、むなしく燒野が原となつて、きのふの面影たづぬるに詮なく、目に見ゆる山、目に見ゆる川、すべて他人にふみにぢられぬ、去かも什器は既に盡きて兵糧また心和く、四面たゝ楚歌の聲を聞く、頃しも秋の半、露は戰袍の袖を濕して冷やかに、月は黃葉の山を照して明かなり、あはれ、この露、この月、人々の心はいかなりけむ、大なる人は從容天命に安んじ、小なる人は慷慨一死を分とす、されど人すでに木にあらず、石にあらず、一つには國を憂ひ、又

たゝ一つには家を省るの情緒なからでやは、さても思ふにあまる思慮を包み、同じ枕に討死の覺悟きはめて城山の奥、岩崎谷に立籠りたる幾多の人が、今日このごろの心の中、偽りがちの世の中に、思へば類すくなき誠心なりけり。

九月も既に中旬を過ぎぬ、官軍の準備は殘る隈なく整ひぬ、されど私學校兵は、秋風骨を埋む故郷の山と吟じて更に立出づるさまなければ、押し寄せし官兵はいつしか事なきに苦しみつゝ、きのふ今日はたゝ總進撃の號令のみ、今か〳〵と待ちかけぬ。

この頃の事なりき、肥後に戰沒せし國道君の實弟國容君、久々にて予が家を音づれ給ひぬ、君はかつて海軍にありて刀筆の吏なりしが、亡せにし兄の弔ひ合戰にもとすゝみて、身を陸軍に移し、すでに肥後に戰ふて一たび手疵を負ひ、長崎病院に入り疵癒えて再び陣に臨み、きのふは城山の東、淨光明寺岡の下なる陣所にありと物がたり給ひぬ、越えて一日、予は父の命を帶び往いて國容君を訪ふ、こゝは城山に近く警備もいとゝ嚴しく、處々に置かれし番兵は、兒童たりとて通すまじと一つ〳〵に予を誰何せしかば、予も一つ〳〵に國容君を訪ふありと答へつゝやう〳〵に通りゆきぬ。

さても國容君が昨日けふ留まりし陣所の上は、名に負ふ淨光明寺岡にして正面に城山を望み、南方の墓地よりは私學校徒が此處ぞ最期と立籠つたる岩崎谷を見下すべし、と見れば幾多の官兵こゝに集まり來て、さす方の岩崎谷を指しつゝ、

やれ彼處に出でたり、此處に顯はれしぞと、さながら走りゆく獸の蹤跡を追ふごとくに絶えず小銃を放ちぬ、これぞ正しく私學校徒の出沒を伺ひ狙ひうつにやあらむ、よく中りしか、中らざりしか、此方の予にはわからねど、中には討たれて急所の痛手そのまゝ其處に斃れしもあらむ、淺からぬ手疵あふで引退きしもあらむ、そもや一微氣早の薩摩隼人が、斯く傍若無人に振舞はれて、若かも一丸の返酬もせざるは乏しき彈丸を惜みてか、たゝしは全く盡きはてしものか。

この日、國容君は予に向ひ、折角きたり音づれしが、陣營の事、馳走のすべきやうなし、いざこれありとて手近にあり し鉄業の鑵より砂糖と名も知れぬ香料とを取り出しつゝ、水に和して進められぬ、予は其頃まで嘗て味ひしことなければ今より思へば普通のレモン水なりしなるべし、うまきまゝ無

遠慮の予は思はず數杯を重ねたりき。

折しも一人の下士官きたりいふ、今朝生捕りし賊兵の言葉に依れば、城山には彈藥すでに竭きて、餘す處の砲丸たゝ十餘發のみ、若かも用うる大砲さへあしと、かくと聞いたる國容君は、ナニ十餘發とな、みな打たすとも、やわか何程の事あるべき、斫り込むべし〳〵と叫びつゝ、起ち上つて腰刀の鞘うち拂ひ思はず小躍りして喜ばれぬ、予はこの狀を見、この談話を聞き、最早城山の沒落遠きにあらざるべしと、幼心にも深く感じ、歸りて今日の現狀を委しく父に物語りたりき、かの河野主一郎、山野田一輔の兩君が、私學校徒將校の命を聊み、參軍河村純義氏のもとに赴きしも、この日あたりの事ならむ。

げに九月二十四日、予が終生ながく忘るべからざる九月二

十四日は來りぬ、この朝、城山は官軍の總進撃をうけて陥り、立籠つたる西郷先生を始め、桐野村田の面々みな枕を同ふして岩崎谷に斃れ、三州の精鋭はこゝに盡き了んぬ、されど戰闘はたゞ形ばかりの戰闘として暫時のうちに事濟みたれば、その物音を聞きつゝも、かゝる大引の戰闘なりしとは、さら〳〵以て知らざりしものさへ少からず、かくいふ予も實はその中の一人ぞかし。

けふ官軍の總進撃ありとはかねても聞きぬ、城山の没落また遠きにあらざるよしも知りぬ、さりながら今日まで敵を支へし私學校徒が、わづかに今日の一戰に忽ち滅び亡せむとは夢にも思はざれば、もとより幼おき予は總進撃といふことの意味さへ深くは知らざりき、さればこの日、曉の空に一たび小銃の響と、一たび鯨波の聲は聞きしが、また忽ち已みしま

ま、絶えてこの小銃の響、この鯨波の聲によりて城山の陥れりとは思ひもそめず、二たび夢さめて速く起き出でつゝ、折しも一昨日より下荒田なる實家に歸省し給へる母上を訪ひまゐらせむと、父に乞ふて立出づれば、市中は何とやらむ事わりげの樣なれど、この時はまだ處々の哨兵きのふのまゝに猶儼然と警め居たれば悟るによしなく、江田の家に赴きしに、たま〳〵母上おはしまさず、叔母君たち出で給ひ、おゝ、よくぞ來りし、今朝城山おちて西郷先生をはじめ、みな〳〵討死したまひしといひ聞かされ、初めてそれと驚きぬ、疑ひもなく城山は今日の曉方におちけるにて、午後は此處もかしてもこの暮れぬ。

蜘蛛手かく縄十文字、みだれ〳〵し世の中にも、末に置ける白露の、つゆいさゝかも亂れぬものは武門の意氣地、そも〳〵私學校徒が稻麻の如き永井村の重圍を斫りぬけ、はる〳〵の數十里の轉戰辛苦をものゝ數ともせず、心ひとつに故郷の死場をさして駈け來りし胸のうち、あはれ何とかいはむ、事の最初より死生を誓ひし大將株が互にたのみたのまれしは固より理の當然なれど、尋常一樣の兵士まで一點の變心なかりしは、何たる哀れ、何たるいぢらしさぞ、思ふは孤軍永井村を出でゝよりは、行伍もとより整はず、規律また立たず、ゆくも歸るも進退たゞ自己一人の自由なるのみか、するだけの勇戰はなしぬ、つくすだけの情誼はつくしぬ、この上は自己がまに〳〵引去るとも敢て男兒の恥辱ともなるまじく、さては、又た退くに退かれぬ義理もなければ、生命を全ふして

父母妻子を顧るとも、さら〳〵以て丈夫者とは唄はれまじきに、なほ一旦の義を重むじて露いさゝかも離るゝ心なく、萬が一にも勝たむは愚か、行手はたゞ死といふものゝ日夜に迫り來れる城山に馳せ入りて、同じ枕に秋の朝露と消果てたる殊勝さ、さかも西郷先生の息の音かゝりし青年のみにあらず、たゞ其かんばしき餘風を慕ふて、はる〳〵中津より、熊本より、さてまた福岡などより馳せ加はりしものもありしとか、兎にも角にも一死を決して城山に籠りしものは、傳え聞く往時のまゝの武士氣質もて、おのが全身を彩どりたる精鋭無比の人々が寄り集まりしものなりき。

さればにや二十餘年を夢とみし今日、微兵の制度、軍備の整頓、殆んど歐洲の强國に讓らず、かつや日清戰爭より日本軍隊の聲譽一入さらに世を驚かせぞ、かなしいかな、その精

神氣慨とても當年の私學校徒に及ばざるは勿論、よしやこれより五年の後、十年の後、たとひ兵制いよ〳〵進歩し、兵力ます〳〵完實あらむも、かくの如き古武士のまゝの精神氣魄は終に再び見るべからざらむ、されば純粹なる日本武士の最後の戰爭は、この明治十年の役にて、城山の沒落は日本武士が最後の櫻花一輪、くわッと朝日に匂ひ出たるものならむ。

過ぎし明治二十七八年の役、征清第二軍が滿國無比の要塞旅順口を陷るゝや第六師團の長谷川少將が指揮に屬せし混成旅團、尤も勇戰して功績すこぶる多かりしが、少將は劍を按じ慨然としていへらく、あゝ慨ひらくは當年の私學校兵をして斯の役に當らしめざりしことをと、後日さらに人に語りていふ、もし南洲翁をしてこの兵器を有し、この天險に依らしめば、新手の精銳いかに攻むるも十年これを陷ることは能はざる

べしと、少將は西南の役に近衛兵の大隊長として屢次私學校徒と戟を交へし古武者、玄かも此人の口より此言葉を聞く、もつて私學校徒の驍勇いかなりしかを思ひやるに足らむ。

葉末における朝露もろとも、この曉方の空を餘波に城山は陷りぬ、西郷先生を始め、重なる人々の死體は、その日たゞちに淨光明寺岡に葬られぬ、時の縣令岩村氏みづから手を下して血にまみれながら感慨に始末したる好意は、いたく薩摩隼人の腸に染みわたりけむ、この頃二千石は武士道を心得たりとて、今に薩人の談に上りぬ。

さても二十四日の曉、今日こそ官軍の總進撃あるべしとは、敵も味方も兼て心に期したるところ、されどきのふけふ岩崎谷の奥には什器すでに盡きて喰ふに食なく將士いづれも草を取て飢を凌ぐの境涯なれば、たゞ一時も早く同じ枕に斫死せむと、思ひ〳〵に死支度かひ〳〵しく、すわ官兵の押し寄せたりと見るや否、ござむされ待ち受けたりといはぬばかりに、かの〳〵岩崎谷の入口に疾風の如く駈け出でつゝ、秋風落寞、宛がら木の葉の舞ふに等しく最後を競ひぬ。

きのふまでも、今日までも、敵の砲丸といかざる土窖の中に偉大の身を安んじて、宛がら人事達觀の達摩大師を見るが如しと傳へらるし西郷先生も、二萬の子弟すでに盡きて今日を最後と思はれけむ、やをら身を起して、折からの秋風いかに吹くやらむと、彼方此方を歩まるゝ背後より、流れきたりし彈丸一發、山の如き腰の眞中を貫きぬ、この時までも重傷を裹むで其後に從ひし別府晋介、かく〳〵と見るより抱き起して疵口を押へつゝ、もはや今生の御別れぞ、不肖晋助憚りながら御介錯つかまつらむと、涙あがらにいへば、先生例の滿面に微笑を含み打默頭て辭なし。

やがて壞れて空虛となりにし水道の中に首級を押し隱した る晋助は、心しづかに最後の合掌を手向けつゝ、これまでぞ方々、もはや先生斃れたり、もはや先生斃れたり、大事畢んぬと叫びながら、身を躍らせて敵陣にかけ入りしが、その斫死の最後に至るまでチエーストの聲は止まざりしとぞ。

國容君の談話に依れば、かゝる火急の折からあれば、深く

霧ひ隠すの暇やなかりけむ、間もなく西郷先生の首級は官軍の手に見出されぬ、されど其首級を埋めし傍に茂れる竹の小枝を斫つて地に樹てかけ、さし入る日光を拒ぎつゝありしには、馳せ集まりし官軍の人々いづれも一種の感に打たれて泫然たりし折柄、三浦中將は馬を飛ばして馳せ來りつゝ、いさかも失禮の振舞あるべからず、と大音聲に戒められぬ、中にも官軍の薩人は皆その顏を反けて男泣きに泣きながら、見るに忍びずとて遁げゆきしも多かりしとかや。

またこゝに桐野利秋は、あはれにも縞あらき黄八丈の袷一重を素肌に纏ふて、佩びし秘藏の一刀ぬきそばめつゝ腹に突き立てひとして流丸にや中りけむ、刃を右手に握りしまゝ俯臥に倒れ居たりしが、いたく痩せ衰へて肉は落ち色は黑く骨のみ高く、意氣軒昂のありし面影は更にあかりしとぞ、實に

この人が痩せたるも道理、衰へしも道理、本年二月よりこゝに八ヶ月二百餘日、幾許の苦戰難鬪を經て勝敗利害の大勢より炊事運搬の小事に至るまで、日夜の苦心に苦心を重ねて心身ともに勞れ果てたる末なればなり。

いかにしても、驍勇猛氣ありしは邊見十郎太、過ぎし横川の戰に、あみ〳〵のものならば、其まゝ其處に倒るべきはずの重傷を頭部に負ひながら、其後も更に屈する色なく、常に小唄を謠ふて亂軍の間を往來しつゝ、けふの最後の死骸を見れば、うちぬかれし鐵砲疵のみにても都合七ヶ處ありしとぞ。

さん〳〵の手疵を貪ふてその屍を横へしは村田新八、某氏の門前を一間ばかり隔てゝ、例の縮緬の褌を纏ふたるまゝ仰向に倒れぬ。

そも〳〵こたび城山に立籠りし若殿原、いづれも薩摩隼人

の名に負かざりしが、わけて藥丸流の打物とつては人に讓らず、數度の戰場に馳せ向ふては、いつも功名を唄はれし仁禮新左衛門、汾陽五郎の兩人が何として死後れけむ、縄つきのまゝ廣小路を引かれゆきし後姿見るも哀れに、ついに官兵の的となつて銃殺されしとかや、ありしむかしの武者振、今はたゞ老人の夜話にその餘波を傳ふるのみ。

われは法律の制度はゞ整ひ、罪人には宣告文を讀み聞かすならひとなりし當時、いかに重罪の犯人なりとて生捕しまゝ銃殺するの筈はなきに、さても此兩人にかぎり斯の如く一入慘酷なりし由縁は、一つは此度の騒動を引起したるそもの張本人、また一つにはそば〳〵官軍をかけ惱して深き憎みを買ひたるがためならむといふもあれば、否とよ、仁義を表の王者の師いかで私の愛憎によりて不公平ある處置すべき、

日頃より頑固の兩人さだめて降服を肯はずして、かへつて抵抗せしより斯る最後を遂げたるものあらむと語るもあり、たゞこの時東京にありし、時の内務卿大久保利通君はかねて私學校徒の機密を知れるもの此兩人の外にあらじと信ぜられしまゝ、その生捕られしを聞いて、事の取調に便り多き手掛を得たるを喜び、たゞちに電報もて、兩人を愛護せよ、搏へて自殺せしむるなと訓諭せしに、事すでに遲れて詮なき後の事ありしとぞ聞く。

さても今度の戰爭に生捕れて餘處につれゆかれしものゝうち、銃殺されし二三の人々を除くの外、半は生命を拾ひ半は磯の濱なる集成館に囚はれて折しも烈しき虎列拉病にとり殺されぬ、されどまた城山の落ちける其場にて無慘にも縛り首を打たれしもの、さては手負のまゝに斫り倒されしも少から

ざるうちに、わけて酸鼻を極めしは、その最初私學校徒が鹿兒島に歸り來りし日、ゆるさぬ母が袖をふりきり、といめし姉が手を拂ふて城山に馳け入りしかの十六歳の少年大迫なにがしが身の上なり、この日、官兵に生捕られ、はては岩崎谷の途端に繫がれしを、その時、軍に從ふて此場を通りかゝり し折田平内君は、かつて故郷にあつて見知りごしの少年なれば、いで歸途には助けくれむと、そのまゝ官命を帶びし身の急ぎ二三十間へだてし處に赴きつゝ、直ちに引返し來れば、あはれ季札が塚の劍、事すでに遲れて縛られたる彼の死骸は首と胴と所を異にしたりしとぞ、いかなる無情ものゝ所爲なりけむ。

かゝる傷ましの話は尙ほ處々に聞えしより、その頃の婦女童幼は是れみな會津人の所爲ぞ、過ぎし維新の戰に打ち負けし怨恨のかず〳〵執念くも報ひに來りしものならむと語り合ひぬ、されど思ひ見よ、情誼を敵にかけ、禮を味方に失はぬは我が日の本の武士の習ひ、玄かも滿生百萬石のむかしより武士道の訓練ものゝ見事に行屆きし會津の武士が、何とて十年以前の恨みを含み斯る殘忍酷薄の事をなすべき、恐らくは是れ、いづく如何なる戰場にも例免れぬ人夫どもが心なき振舞ならむかし。

ゆきて見よ、淨光明寺岡に、折しも夕陽西に沈みて秋風おもむろに吹くの處、暮色すでに鹿兒島の市中を包むで、遠寺の鐘の響きを送るころ、もし人ありてこの岡に上り、累々た

る紀念の石を視れば、中央には西郷先生の墓、右には桐野、左には篠原、つゞいて並べるは何れも私學校徒知名の諸氏、さてまた背後には今度の難に殉じて、江東幾千の父老に涙を濺がしめたる無數の若殿原が死して猶かつ先輩を擁護せるの有樣、そゞろに生前ありしむかしの忍ばれて、千古の感慨を此處に蒐めしが如し、そが中にも父子ともに討死し、叔姪おなじみちに斃れしなど、今更ら數ふるに暇なけれど、村田三介高城十次の四人兄弟、家鴨の馬場の松岡氏が兄弟四人、冷水の鄕田某の兄弟五人これに一人の叔父を合せて一族すべて六人、場所と月日に同じからねど、いづれも最期の花を咲かせて此處に墓碑を並べしは、過ぎし戰國の世に、戰やぶれ、城おちて一門郎從おあじ枕に討死せしと、道は變れど同じ哀れを留めてけり。

將星一たび岩崎谷に落ちて薩南の健兒こゝに亡び、久しく天に荒れたる疾風急雨も、いつしか晴渡りて、きのふまで陣を布き營を結びし陸路幾萬の兵は、ただ地方鎭撫の名の下に一隊の守備を殘して前後おの〳〵引揚げぬ、この夏以來鹿兒島灣を縱橫して時ならぬ煤烟を噴きつゝ威勢を振ひし海軍の艦隊もいつしか港を離れて沖一文字いづくの空に趣きけむ、影も形も見えずなりぬ、

近鄕近在に立退きたる人々は歸り來りぬ、われ一と歸り來りて燒け跡の取片付にかゝりぬ、手廻しよきは一時の假住居を築きぬ、されど多くは小屋がけの假普請、やゝ舊時の市街

の形を見るまでにも、さらに多くの月日を重ねたりき。

六月以來ちり〳〵にちりて思ひ〳〵に立退きぬたる一族郷黨の人々みな歸り來りぬ、まづ何よりも別後の挨拶、さては互ひに語り合ふておの〳〵其消息を傳えぬ、中には討死とげしと聞きし人の尚無事に生きながらえしに遇ふて思はず驚かされしもあり、たしかに恙なしと思ひし人の早や一片の土饅頭とありしを聞いて坐ろに悔舊の涙を灑ぐもあり、その評判いつしか消ゆる頃、戰場より、自己が親、兄弟、さては良人、子息などの遺骸を迎えつゝ、また今更に新らしき涙を手向くるもあり、袖に袂をぬぼるうち、時雨ふる神無月も過ぎぬ、

哀れなるは叔父上靜吉君に連れ添ひし叔母君の身の上、明けてやう〳〵八歳を長に四人の兒女を、女一人の身をかも產後の身に引うけて、寄るべ渚の寡婦となつたるいたましさ、さても城山沒落の曉、良人は生捕られ縛られて磯の濱に引きゆかれし姿、まさしく見しと傳え聞き、たゝちに磯の濱に赴き、四はれし良人の身の上、いかにと獄もる役人に問へば、あはれ靜吉君は烈しき虎列拉病にかゝりて、アレはどの男が一日一夜のうちに逝きしは一昨夜のこと、火葬せしは昨日の拂曉といはれ、せきくる涙のみつゝ、せめて遺骨を拾はひと、そのまゝ聞き及ぶ天保山の原に、火葬場の跡を訪へば、散を亂せる白骨累々として、いづれを良人と尋ぬるによしなく、むなしく涙ながらに引返したりとぞ。

秋すぎて冬のはじめ、かの騒動しづまりて後、肥後熊本の南方、木山のあたり、保田窪にありし家兄が遺骸を迎えぬ、ことし春の初、戎衣輕裝して、叔父が紀念の七連銃を負ひ、父が讓りの刀を佩び、天晴功名せむと初陣の戰場に馳せ向ひし人の、今は夫かあらぬか、わかち難き一塊の骨となり、粗燒ある小さき函に入りて、はるゞ歸り來りし時には、一家一門また今更に袖を去ぼりぬ。

やがて大興寺岡なる予が家代々の墓域に葬られぬ、ついいて吉野の假住居に空しくなりし稚弟を、その假の墓所より迎え來りて同じく此處に、葬りぬ、越えて二年、父上もまた家兄と稚弟との跡を追ふてこの世を辭したまひ、今は二人の子と共に大興寺が岡の麓に永く眠り給ひぬ、まれにとふ夜半も淋しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ。

まゝならぬ浮世に、これのみは折々おもひのまゝなるべき思ひ寢の夢のうち、さては夜ふけ人さだまりし枕の上に落ちて遣瀬なきものゝ哀れをふくみつゝ、今も尙、月にも花にもきのふけふのやうに忍ばるゝ、當時のこと、その頃のこと、あはれ思へば何事も夢、二十餘年の夢の跡。

明治十年

終

片輪車

涙　六

むかしの江戸、今の東京、今昔ともに流石は日本一の大都會とて、九尺二間の裏店より大山を築き出す曲物もあれど、これは事實のこと、百萬の塵つゞきに寂ながら海を我ものとする芝の高輪に、二千餘坪の羅根をめぐらして、冠木門しゞかに白壁さへ固く閉ぢつゝ、車馬の音響を絶て聞えねども、をり〳〵かすかに琴の音ゞする悶しさを、そもや何人の住家かと見れば、たゞ山田ちよといふ女名前の表札のみ、しかもその表札の文字おのゞと木地に沈むで五年六年このかたの塵色ならねば、氏なくて俄かに飛來のし玉の奥の看板にもあらざるべし、

これはとの品物を取込めたる大屋敷に女名前といふさへ往來の人目をひくに、首縊り夜逃の絶ざる大晦日にも閑かに琴の音の漏るゝを思へば、いづれ浮世の底を知らいで現世からなる天上界、まづ第一あの表札の本人いか

なる正盛ぞと、近來この邊りへ落込みし三十面の獨身者が角の三河屋に兜酒ひッかけながら腰を据ゑたづねれば、をりしも番頭つれ〴〵の幸ひに寶の煙を輪に吹ていふ、およそこの高縄に住で山田ちよの四字を知らぬは四十七士の泉岳寺を知らぬも同然、元來あの屋敷は山田周三とて一時は横濱の天地を引轉返した貿易商の別莊で、其ころ柳橋の名物を根こそぎにして植付けたは今より二十年ほどの前、されと流石の男も全盛つきて傾きかゝる運の玉の坂落しには叶はず、わづかの間に吸取つた何百萬といふ身代を復わづかの間に吐出して、二一天作のあとに残つた十分一もろとも哀れ其身の命數も算盤珠に弾き込で、さゝ〴〵の醫藥その甲斐なく、死床の枕頭に認めたる遺言狀には、勿論第一に横濱本宅の始末をつけたる後高縄の妾宅へは、屋敷地面そのまゝ別に五萬圓これは其ころ二歳になる娘の財産として母子生涯安樂の基礎、今あの山田ちよといふ表札の本人が取る直さず其娘で今年が十八、しかも天生の美人たゞ一目みて目を舞すほどの名玉を、うみつけた母親ぢやもの昔の餘波どころかな古鐵買に踏仆しの相場つけさせても、やう〳〵三十二三の迴模こいつ

さた氣が遠くなるほどの眺めで、母子そろひも揃ふた高縄名物、どちらに轉むでも天晴れ男冥利の題一、しかるあれだけの家屋敷そッくり添へた上に正で五萬圓おぼしめしは御坐らぬかと、番頭しきりに我を忘れて乘出す面上へ、こゝン畜生と叫むで兜酒のコップを叩きつけたるまゝ、三十面の獨身者どうやら氣が變になッたる樣子、錢も拂はず眞一文字に飛出して行方知れずなりぬ、

泥濘板の横町より遁出して人間並に出來損ふたる盤大面さへ、娘の十七八といへば親の愁目で人や盗まむと珠玉を抱くの心地、ましてや二千坪の家屋敷に五萬の財産を添て名年の齢も及ばぬ一粒種の娘を、其まゝ斗つけて進上せむほどの花婿には、いづれ世間普通の所望にて滿足すべき筈なく、まづ姑の我身には孝行至極で、なくなられし男親に十倍まさる器量を備へ、しかるオ學智辯あくまで勝れて身持正しう萬事に優しう、物しづかに事おだやかに、さりとて千人一座の爭論の中央へ押出しても更に日色も變ぬ活

勵あつて、男振は固より娘と並べて劣らぬ一對の夫婦、うらみの敵の日からも、道理と合點さすほどの風采に恥くとも二三萬の持參金、さとの兩親はあつても宜けれど差出がましい兄弟もなくて、親類朋輩に無心合力いはるゝ義理を持たず、年は二十五か六七のところ、凡そこの注文に叶はゞ迎へて妻子にせむと母心一念の婿詮擬、されどまづそれよりは大事の本務に怪我あやまちのないが專一、世間に往々ある慣ひ親が産附けぬ虫氣のつかざる用心には、ちやはやと小氣轉の利く下女こそ却て危ふし、根波しの文使ひなどは得て娘の氣に入る下女から起ることゝ、あれかこれかの詮議の末に選びいだされたるは田舍ぢッと出の山國生育にて齋藤拙夫といふ二十六の頑固書生、玄關番と家内の雜記とを兼ねて、うまれついたる不器用さを珍重がられぬ、

大切の珠玉の一人娘を鼠物にさせしと、親の用心きびしさの餘りにつけられたるほどの齋藤拙夫、そもや男の名譽か不面目か、いはずと知れし其容貌は人間の中譯に出來たるばかり、よくもあれまで描ふた醜男を探しいだせる事ぞと、これさへ高輪の一名物に數へられて、本人さらに不然たる顏色いよ〳〵呵し、

花柳の巷には猫の屁へを嗅ぐ箱屈男もあれども、これは年中いつも鬼灯の香に打たれながら生伸びてゆく齋藤拙夫、五體に骨はあるか現世は何の目的ぞと、友朋輩に問はれても唯ひとり笑を含むのみ、固より本人は何か心に信ずるところあつて笑ふたつもりなれど、他人の目からは泣たか怒つたか更に差別のつかぬ醜男なりけゝる、

娘の千代も最初の程は齋藤拙夫を連れて歩く事、何とやら鬼に影を追はるゝ心地して、幾度か母に壁訴すれども、母は益々娘の嫁がるを喜びて、これよう聞きや、親の口からいふは呵しけれど、和女はどの美貌で年頃で下女一人ぐらゐの伴させては迚も安心なりませぬ、それよりは力自慢の大兵が肩脇張て從へばこそ、往來の亂暴書生や生酔の惡戯者も怖れて無事に通すこと、第一が母のため身のため、また醜男もあれまでの醜男を連れて歩めば却て和女の色香も一入照添ふて見增さる道理、なれども然ほど嫌な

らば一切けふより外出させませぬと、妙なところに縛うたれて千代も二百と返せず、つい其まゝに馴れて果は嫁藤々々と心易うなりぬ、されど千代が心には人間二十八の男を連れて歩くとは夢さら思はず、家に飼ひし獨逸種の人が飾るゝを幸ひ其大犬を連れて身の用心するが如くに思ひぬ、われ嫁藤拙夫も洋犬と一般の扱ひせらるゝに至つては驚せりといふべし、

去年の大學卒業には隨一の優等生として夙に才名かくれなき二十六の男さし當つて衣食の道を急劇陞騰せぬところに前途の見込ありと勘ひるものあれば、それよりは押しても潰れぬ某銀行頭取の二男にて今年の春に英國より歸朝せる二十八の男、さては某會社々長の紛にて一二年の後は必ず重役になるべき筈の男二十七、あるは敗亡の財産を分られて將に北海道の小樽に商族を翻へさむとする男二十九、これを引止めて東京住居さす方はありなむ、官吏、商人、醫者、辯護士、軍人、會社員、新聞記者、其他あらゆる當世紳士が手を代へ品を遷へて日夜さまざまの申込は、殆ど都下に女は無き

ものかと疑ふばかりに競爭の姿なれども、母親の氣に入るは娘の心に染まず、娘が嫌でもないは昨に故障ありて、わたら名花そのまゝ十七より十九の秋まで空しく過せし最後に、平生出入の小道具屋が手柄顔に飛び込來つての言葉には、今年やう〳〵二十七で某會の參事官その父は曾て某縣の知事を勤めしが今は貴族院の議員しかも本人の美男は令嬢社會の呼物で日鐵の株が一萬五千圓の持參、もしこれを亦お外しなされては惜れながら私も多年の御出入を今日かぎりに御免蒙りますと、おのれが大事の商賣を賭けてまでの熱心に見ゆれど、實は婚姻の諸色一切を一手に引受けて、ゴッソリ占めむがための一生懸命おのづから母親を動かしつゝ、されば二三日中に確とした御返事するとの答を得て飛ぶが如くに走歸りぬ、

人は殘暑の汗に苦しめども、はや草木は朝夕の秋に促されて、漸く七草の時得顔なる折しも、一日のこと、學の師匠が日本橋の淀町へ轉宅せしを、今までと迹ふて路も遠ければ、すべての挨拶かたがた向島の百花園を見た

しとて、例の齋藤を引連れたるまゝ二臺の宿車を走らせつゝ、やう〳〵たづねあたりしが何ぞにや此家より車を返して家内に入りぬ、

やがて一時間あまり過ぎて後、またせし齋藤と共に師匠の家を立出でつゝ、これから向島の百花園ついでに淺草の觀音樣も拜みたしとて、鐵道馬車を雷門にて下れば、わづか中街を歩む間にも幾千人の男に思はぬ罪を作らせ、公園の群集に入りては萬人の面がまちを一度に崩させぬ、

淺草より吾妻橋を渡りて其處なる車を備ふにも、齋藤が一錢二錢に吼て爭ふ袖を引きつゝいふだけの貫價とらせて往復二臺を走らせながら、秋の天地に誇る萩も桔梗も色香うしなふばかりの美姿を、またもや百花園より吾妻橋まで引返せしころは、はやその日の夕暮となりぬ、

さア嬢樣おくれましたぞ、一時も早くと促がす齋藤に言葉もなく、幾度か聲をかくれども其まゝ無言に歩む風情いぶかしく、さりとて袂を掴むで引摺りもならず目をむきだして怒りもせられず、さして人中に只さへ萬人の視線をひく美人、殊方なさに從ひゆけば再び中街に入りて、おりしも觀音堂の背後に夕暮の人氣すくなきを倖とや、此時やう〳〵振返りて立止まりぬ、

岩穴の燈明めいたる奥目を光らして、齋藤おもはず眉を顰ひれば、千代しづかに笑を含むで顔を赤めながら、ねェ齋藤や、この邊で夕御飯を食べるところはないものかね、お前これで何とかしておくれと、胸帶の間より十四札一枚ひらりと出せば、齋藤いよ〳〵ぎよッとして首骨を縮めぬ、白銅一枚とて手にあるまじき家風、第一が人に聽ぢ世間を憚かり勝の性質とて、かく夕暮の驅れぬ土地に家を離れて、しかる料理屋ならでは整はぬ夕飯を急ぐ風情、元來あの師匠の家から車を歸したが抑々今日の不思議の最初と、今更めいたる齋藤の迷惑、されど強て爭はゞまた的もなく無言に歩みいだして、今夜とてまで行くやら知れぬ生物その生物も牛馬ならば一番てゝを力だめしに鼻づら掴むで引摺戻す手柄の力もあれ、何をいふにも胸らば仆れむ美人肌の處女一人、此上に強ねて面ねられては迎る手のつけどころなしと、やう〳〵腰を押据て兎も角も十四札を受取りつゝ、さて大切の身をあづかりし役目するだけの陳言して後進退こゝに谷つて中街の萬梅へ案内しぬ、

一目に主從と見て取りし營業がらの鑑定、奥まりたる一室に入れて料理の品を何へば、齋藤かの十圓札を差出して八圓の剩錢を與れといひぬ、さては一圓づゝの御膳部と心得て、其まゝ女中の立去りしあとに、千代は世に驚れぬ娘氣の胸一ぱいを涙と共に思ひきッたる顏色、平生は見る度毎に呵しき齋藤が不出來の顏しみ〳〵と見込で、ねェ齋藤や、お前ね、あの妾を此まゝ連れて、どッかへ遁げておくれでないか、もし嫌なら、お前ひとりでお歸り、わたしや獨身で往ッちまうから、

齋藤うまれてこゝに二十七、それも人間並の男ならば、また自惚に取違ふて堅な心地もせむが、さて鏡に對ふて我みづから我を知る齋藤拙夫、たゞ罵慢に餘つて自目眩なる兩眼むきいだしたるのみさらに言葉もなき面上を、天の作せる美人の眼球いき〳〵と浮て光りて、膝つき合さひばかりに押詰めたるまゝ、兩の手をかと握られながら、お前いやかえといはれし時は總身ゾッと寒く、鰐に似たる聲わッと叫むで思は寸飛迸きぬ、あはれ世にも

人ぞれぬ不思議はありけり、

百萬の數つゞきに庭ながら海を喪物とする芝の高輪に、數寄を極めし二千餘坪の家屋敷そッくり其まゝ添へて、たが指の差手もなき正で五萬圓の財產を母子たゞ二人あるが上にも時の流行を過さぬ衣食の料、あかも冠木門あるづかに閉せる表札の名前人、娘の千代は出來損ひの盲目按摩に探らせても古今の名玉、いかな古鐵買が見仆しにする天生の美人、こゝに十九の秋まで定まる緣もなうて、泉岳寺の外の一名物とうやら聊か來ひ遲れたる風情、深窓の夕いたづらに暮行く空を眺めて蛾眉を顰め、寢覺勝の曉いと、

ゞ軒端の露に物おもふて沈み勝なりとは、都下幾萬の獨身もの傳へて餓かに氣が逆くなりぬ、

九尺二間の裏店に芥溜と雪隱の間より遁出だしたる南瓜種、あたり年ならば猫更のこと、拾てゝも拾ひ手のなき化物さへ、娘と名のつく十八九は親の愛目に珠玉を抱くの心地、まして二千坪の家屋敷に五萬の財產を添へて名筆

の面も及ばぬ一粒種の娘を自由にさすはどの花婿、そも〳〵千代が苦も持たぬ茅生のころより日夜たゞ是沙汰にて、あれかそれかと陞職の星霜いつしか十九にもなれば、まづ何よりは本尊の無事が第一それについても世間體の下女侍婢は却って危ふしと、わざ〳〵海山越ての片田舎より変梟醜婦の役目に呼寄せたる齋藤拙夫といふは猫が嫌ふて喰はぬ鰹節と一般、おもひやるべし凡そ二十七の男と生れて大事の生娘に朝夕つけられながら母が安心するはどの容貌氣質、固より人間の中間に出來たるばかり、

娘一人に婿八人の世諺はおろか、三年以來およそ幾百人の中、その最後に出入の道具屋が飛込來つての手柄顔は、今年やう〳〵二十七で業合の委事官そのの父は曾て某縣の知事を勤めしが今は貴族院の有力者若かも本人の実男は令嬢社會の呼物で日銭の稼が一萬五千圓の持参、もしこれを亦お外しなされては恐れながら私も多年の出入を今日かぎりに御免蒙りますと、おのれが大事の商賣を賭けてまでの熱心に母親まづ動いて、娘の千代にも得

心さへ、いざ然らばとて物の八九分これにぞ定まりぬ、

今までとは違ふて身が定まつての上は母の計可ばかりで外出もなるまじ、ゆきたいところがあれば今のうち、娘といふ名もて〻酉時、あの齋藤を連れて心のまゝにと、どこやらに安心しての假か放生ながら、千代うまれついて世間を憚かり勝の打沈みたる體、淵劇その他の物見ともいはず、たゞ芝山内の孝の師匠が此ごろ日本橋の淑町へ轉宅せしを訪問かた〴〵、幸ひ向島百花園の七草を見だしとの一事に、例の齋藤を連れて宿車二臺を走らせしが、その空車は師匠の家より午後三時ごろ立歸りて後、四時五時六時、はや暮れがたき秋の日の夜に入りても歸らねば、母親てゝに假かの胸騒ぎ、時計の針の進むにつれて思案いよ〳〵亂れつゝ九時に驚き十時に立騒ぎ、いつしか十一時をきくや否や下女を走らし下男を追立てゝ、まづ出入の宿車にあるはどの曳子十三人、平生より三倍の賃錢に不時の酒代を添ての上、なほ見付山して連歸つたものには三十圓の懸賞をかけての大騒ぎとなりぬ、うまれてこゝに十九の年まで、火を點して後は庭前にも出でざる内氣の娘、まして世間しらずの懶子に育ちて隙間もる風さへ服ふ身が、いかに力自慢

の岩壁男が附添へばとて、夕餐の時刻も忘れて夜の十一時までとは偖も不思議の珍事出來、もしや途中で怪我あやまちのあらざるか、第一あの齋藤が何とせしぞ、いつぞや酔漢が娘の學校歸りに戯れしとて蝮のやうな鐵拳をふりあげて巡査騒ぎに逢ふたるはどの男、よもや油斷して群集の中に取失ひもすまじく、また急病ならば何處の醫者へも連込で電報をうつべき平生の言付、その他に不意の出來事ありとも更に脱るまじき齋藤が、あの大目玉に岩木の壓腰踏張つての附添だけに、一入なほも胸を痛めて狂氣の如き其夜の一時すぎ、師匠の家を叩き起して陸蒸籠を遣げたる車夫の注進、向島百花園の夢おどろかして驚歸つたる委細をきけども、悲しや間に打出す飯砲玉さらに、何の手應もなく甲斐もなし、あたら名玉はや碎けて粉となつたる母心に、血の涙もろとも其夜の曉かけて上を下への大騒動、この家屋敷を今このまゝの空にしても、この身代を人しれぬ泥溝底に抛棄てゝもと、足摺しながら八方に人を走らして紅々の交番所に聞合せ、あらゆる警察署に捜索願を差出せしが、其日また一日なひの音沙汰なければ、前夜三十圓の懸賞が忽ち一足飛の五百圓となつて、

平生出入の男女を貧乏退治の一生懸命に飛廻れども、二日三日五日六日、はや半月を過しながら日當の外に五百圓ばかりと頻邊に吸付けるはどの、冥加者なし、

高輪の一名物が消て無くなりし近來の一珍事、傳へ傳へて近處の口より世間の風聞にも上り、果は新聞の雷種にまで唄はれて、親の油斷と娘の色香を手に取る如く事あるやうに書立てられしかば、さらぬも涙に身を浮くばかりなる母心は、辛さ悲しさ口惜しさ腹立たしさに遣瀬なく、出入の者とも打寄つての私闘にも、當分しれぬは極まつた嬢樣の行衛より先づ差當つて眼の前に狂ひ出す母堂樣の行衛に氣をつけよとぞなりぬ、

曲物と失物いづれ悪とは、いはねど誰が胸にも第一に浮ぶ事それにしてから獨逸種の喧嘩犬に等しい大男、あかも二目と見られぬ日本一の醜男あの齋藤が、よしや狐狸た月下水辺の刷毛ついでにあづかるとても、大丈夫なむのかのと坐優しい仔細のあるべき筈はなし、さらば人しれぬ處女心に年ごろ思ひ染めたる情郎あつて、落人の宵闇てらす提灯持とも知らぬ齋藤が御用すむでの上へのお拂ひ箱、其まゝ手に手を取ての芒尾花といふ紋切形

か、ひかしの草双紙めいて悪黨に匂引かさるゝ時世でもなし、選ふみ迷ふても十九の嬢娘わけて怜悧の學校生育、町名番地をさして飛乘の車夫に百圓やらるゝとも手柄となるべき御身代、さては向島の夕暮に土堤より駆つての南無三寶、申譯なしとて律儀一片の齋藤そのなゝ出奔せしか、それにしても一月の今まで死體の浮上らぬ筈はなし、うき〳〵らば世間なみ〳〵の土左衛門とは違ふて無疵飛切の眠れるやうな哀れの美貌、忽ち萬人の手向に逢ふて鞠目盤目の我等まゞ知るべき筈、やれ不思議、さても奇怪と立騒ぐ此騒動の中にても、現在二十七の男盛として俱に連立ちながら露いさゝかも疑念のかゝらざる齋藤拙夫、あはれ幸か不幸か、よく〳〵不出來の人間外に生れついたる面がまち、なるはどこれもまた高輪の一名物、

玉川のちよろ〳〵水も逆く遡りては、三百年來げに滿都百萬の生命を駕ぐ水勢すさましく、八王子街道の背梁あたりは山また山の打つゞく懸崖に挾まれて、みおろす谷底の大河原に小石もろとも押流す奔湍の勢ひ、こゝに

五日市が背負上げたる杉山の変態に、たが住荒しけむ一宇の草堂あり、いくとせの雨にうたれ風にさらされ、さては朝夕の霧に吐かれ露に呑まれて、柱は歪み軒は傾き、月もる窓の片廂おのづから古今の詩歌に叶へども人訪はず、朽ちたる床板に花咲出づる自然の風流も住む人なければ嘸て樵夫が斧に撓かれて、あはれ炭やく煙の料とやならむ今日このごろ、迷ふて來りしか悟りて來りしか、いづれにもせよ忽然として住込みし一人の男わり、そも〳〵今の世に斯る片山里、若かも朽果たるこの草堂に何がための住居ぞ、里にいでゝ米一俵を荷ぎ込みしといへば、固より世を振捨てゝ仙を學ぶにもあらず、草庵の蔭を呼で味噌醤油の通路を問ひしといへば、此奴は生命は惜かる俗界の一物、さりとて借錢乞に攻められて四面の逆歌群程より逃出したる暫時の隠家とも見へず、また都の華奢名聞に飽て山水を友とする富貴の果とも見へず、草堂の傍に回める岩組を幸ひの徒として松の梢より一個の鍋を吊しかけつゝ、一切萬事露命の種は此中にありとの仕掛け面白く、おり〳〵崖傳ひの河原へ下りて四に傾く夕陽も知らぬまでに漁るを見れば、また生臭きものならてはは叶はぬといふ厄介物か、さてもわざ

わざ何がためにこゝへは來れる、

百尺紅塵の都大路さへ朝夕なむとやら肌すゞしく軒端の露に風さそふころ、いざや平生の無精者も草鞋がけの時節到來、野には草花さては虫の音、山いよ〳〵高くて二月の花よりも赤く、水いよ〳〵低くして流れ白きが上に、おりからの明月さしいでゝは堆つたものにあらず、林間に酒をあたゝめて紅葉を燒くは古い野暮なり、松の落葉を掻集めて焚をわぶるの類ひは凡俗の業なり、こゝと靶の中に平鍋一羽ばのばせて山家の圍爐裏に丸くべの天眞爛漫、乃至は田舍の一軒屋に磨かば珠玉の少女を見付出して其まゝの飯文なとゝ、いづれも我から學問の岐路に踏迷ふて可惜ら十年の苦學を橫筋違に得たる怪物三人、そのうちの一人は戸籍面の本名を嫌ふて徒ら碧の雅號で聞へたる小說家、一人は生若き糸瓜面に金縁目鏡をかけながら身には被布仕立の俳諧熱わざと稱して平民文學の大家といふ、今一人は新聞記者中に三面種をもて叩きあげたる惡達者の筆まめ男、これも此のごろ退社して新

體詩人の牛耳をとるとぞいふ、

かゝる怪物三人が打揃ふての秋の旅路、おもひやるべし道すがらの氣炮亂丈、酒アたる野面に吹寄する風すゞしく五體の駄骨ののび〳〵として飯田町より汽車に乘り竪川より青梅線に乘替つゝ、青梅の町に下りて後は、やア俗兒々々、一時も早く通りぬけむと山がゝりに駈込で玉川の河原に出づれば、ぬッと見上ぐる眼前の屏風に圍はれたるが如き山また山の絶景に、妙と叫び奇と喚び快と呼りつゝ白痴が物に驚いたるの體、やゝ暫らくてゝに涙して又もや前面の杉山に攀登らむとす、あはれ此の三人に疲をかけたる怪物その杉山の草壁にあらむとは、これこそ妙と叫び奇と喚び快と呼るべし、

緻密周到といへば仔細らしく、神經機敏といへば人間最後の琴線に觸るゝこと速しといへば如何にも高尚幽玄なれど、つまるところは小腦にして驚き易く忽ち器に溢るゝ虛榮の性、何事にも女々しうて仰々しきが斯る新型の習慣、ましてや今年はじめての山入に思はず見出したる岩間

の一草堂、あかも平生の文章詩歌俳諧に古人の糟粕を偷むで我物顔に叫む
だる風流文字の一切が、ふしぎや悉く實際の今こゝに唯だ茫然として醉へ
るが如く、宛から白髭童顔の神仙このうちに在すが如く思へば、今更ら俄
かに怯氣たちて互ひに背ざめたる顔を見合すのみ、五體おのづから畏縮み
て骨ぞッと寒し、

折しも草堂より現はれたる一人の大男、今まで秋の日長の午睡や食りけむ、
こゝに三人ありとも知らず丸まゝの背を逆向けて、岩間より湧來る苦清水
に顔を洗ふ間、つく〴〵みれば仙骨稜々たる翁と思ひの外、これは〳〵鐵道
線路の工夫にしても二人前の日當たしかなるほどの大凡骨に、三人あッと
呆れて俄かに勇氣を呼返しつゝ、たかゞ樵夫か獵夫の比類と差寄つて聲を
かくれば、彼方も黙いて振返つたる顔面に二度驚愕、人か化物かと疑ひぬ、

されどまことに人間、あかも傾き破れたる盆越に覗へば、蘚かづらもて手
細工に綜り合せたる板子の机を備へて、これに年硯紙墨の用意もあり、か
なたの隅には書物なども積重ねたる體、さては山賤ならで文人の世を逃れ
し隱家か、いくとせの山住居に手足も顔も荒れて荒れて化物めいたるならむ

とうやら我黨の奇人なりけりと、はやこゝにまた忽ち馴々しう一碗の淹茶
を乞へば、主人の男も三人を打眺めて眉を顰めしが果は心地よげに首肯き
ぬ、いざ入り玉へ、都の人々に何の驚走はなくとも、夜に入らば宿もかし
まるらせむ、飢へたらば雜炊を振舞はむ、里に出るならば十分一の間道を
送らむとぞいひぬ、

みれば見るほど大古の民にも似たらむ浮世の外の境涯に、三人いづれも好
奇心の膝を進めて、主人の來歴さぞや面白からむと問へば、さらぬも不山來
の目鼻を一つに寄せての苦笑ひ、はゝゝゝゝあらたまつて語るほどの仔細
もなけれど、そも〳〵今の時勢に反いて二十八の男盛が斯くの次第、まづ諸
君の御目に何と見へますな、いふ聲さへも雨夜の遠音に響く破鐘の如し、

さてかくも不思議の實際に當りては、原稿料いくばくで一夜づくりの三文
小說を書くとは違ひ、點取の駄發句を並べて當座のお茶を濁すやうにもゆか
ず、さては探訪の地種に針小棒大の筆かきまはすには引代へて、たゞ默然
と木偶に等しき三人の顔を、主人の男しづかに見遣りて、いざ然らば我よ
り語り出でなむ、

うまれは備中の山奥、姓名は齋藤拙夫、さる仔細あつて東京に出でしが、はゝゝゝつまりは戀で御座るとゝふ、

赤蜻蛉にありし『片輪車』は其名にそむかで尻切蜻蛉の片輪文にて終りしまゝに文をついで全篇とはなしぬ

三人おもはず吹出さむとする臍茶の苦痛を奥歯に噛殺して、

さみ〳〵見れば見るほど醜男も醜男、これほど念入に出來上つたる面がまちでは、横町の牝犬に仕かけても叶はぬ筈の戀、

さるを況してや恐れ氣もなう、うう〳〵しくも生ある人間の美人に向ふての戀とは、神武以來の珍事出來と心に呵しけれど、口には山中でも通用の世辭、やゝ定めて深く契りし君を亡ひ玉ふての通世ならむ、いはゆる失戀の悲慘に名利を抛ち

し詩人の面影、こゝに俗世を脱却し玉ひしならむといへば、

齋藤さきりに賽槌頭を打振て、いや〳〵我は天生かくの通りの面貌、所詮この世の女に縁といふものあるべき筈も御座らねば、同じ戀なれど自分の戀でなし、申さば他人の戀に浮世を覩せし心機一轉の山住居、おもはず花の影を踏で脚をあげしと一般、餘所目には嘲や白痴の骨頂とも笑はれむが、我ためには水中の月、手に取らねど岸上の一念うたゝての境涯を甘むするに至りし本尊こゝにありとて、取出しつゝ示せしはかの千代子が寫眞一葉、

三人おもはず膝すりよせあがら、豆を啄む鳩の如く額をあつめて見れば、なるほど美人も美人、唐土の腐れ儒者が落雁沈魚閉花羞月と叫びし詞も及ばず、御國ぶりの痩學者が蒲柳けて優に妙しう侍りと吐せしも物かは、およそ人間皮肉の美を

あつめて曲線の巧を神の業もて凝したる摸型とも稱すべく、令嬢安寳の當世にもこれはまた無類飛切の令嬢風、かゝる美人に惚れる腫れるとは恐れあり、たゞ謹で敬愛すべき美人これが生きて動いて物いふ色香いかならむと、平生は東西古今の英雄豪傑を時計の器械か何ぞのやうに心得たる解剖的の三人も思はず感に堪へたる體、あッと呆るゝ聲も得立てず、たゞ無言のまゝに嘘のみ働かして、寫眞の面と齋藤の顔を七分三分に睨み分けぬ、

此時、齋藤から〳〵と笑ひしが、また愁然として差俯きながら、諸君、その寫眞は美人ですか醜婦ですか、そも〳〵また毀譽褒貶なしの世間普通、いはゆる十人並と稱すべきものですか、

三人やう〳〵口を開いて、美醜の論は人間界のこと、これは

正しく天女の現世に出現せしもの、元來いかなる氏素性と問へば、齋藤いよ〳〵打凋れて聲を曇らせながら、それは兎も角も後の物語、まづその美人が世に唯一人の母親を振捨て生涯安樂の財産境遇を抛ちしのみか、瓊玉の一命まで無いものとして惚込みし男、戀を仕かけられたる男、そも〳〵いかなる男と思はるゝぞ、こゝろみに想像し玉へときくや否、三人たゞ煙に卷かれし心地、茫として互ひに顔を見合せつゝ、さても主人公の心憎くさよ、山海の珍味を盛りし器の香を殘して餓飢道の亡者に示すと一般の責苦、あはれ一時も早くその可喰人を語り玉へ、その冥加男そもや何者と問返せば、齋藤拙夫云づかに指頭もて自己が獅子ッ鼻を輕く押へながら、その男これで御座る、

いかな背虫も斯くと聞いては呆れて反返らざるを得ずと、三

人かもはず聲を揃へて高笑ひせしが、果は聊か憤怒の體、人を嘲弄するにも程こそあれ、まして先刻は自分の戀でなし、他人の戀を見て無常を感せしといはれながら、今となつて其戀の本人を我なりとは前後矛盾の口舌、こりや山中に踏迷ふて歸るべき途も得去らぬ我等と高を括つての戲事かと怒れば、齋藤かもむろに首肯いて、諸君が御立腹さらに無理とは存せず、いや道理至極、なるほど其美人に生命までかけられし戀男を我といはゝ嘲弄ともなり、また人を愚にする一場の戲談ともなるべき筈あがら、さて何とせむ、うそ虛僞のない證據また外にあるのみか、自分の戀でなし他人の戀と申せしは、我この天生不具同然の醜男として所詮それほどの美人に戀すべき道理なし、かるが故に我戀ならずといふ、されど其美人の我に戀せしは眞實の事、かるが故に殆ど他人の戀といふ、そ

もそも戀なるものは男女相逢ふて相愛する情の至れるもの盡せるもの、さるを我に戀なくして彼にのみ戀ある、これを他人の戀として可ならずや、文明の今日三十未滿の血氣男が浮世を捨てゝ山住居の白痴さも亦こゝにあり、乃ち其寫眞の外の一品これぞとて、また取出したる一通の艶書、去かも女流の名筆あの美人の手跡と思へば猶更に怒しく、さすがに三人も今は我を折りながら、その玉章拜見と手を差出せば、齋藤去づかに見遣りつゝ、願くば門邊の岩清水にて洗ひ玉へ、人には厨屋の籠に捨込まるべき一枚の反古なれど、我ためには世を反きし生涯の獨居に慰むべく悲しびべく嗅ふべく笑ふべく悟るべき哲理を含みし一篇の金科玉條、もし見るに及ばずとならば手を洗ひ玉ふにも及ばじとぞいひぬ、三人も何とやら宙宇に吊上げられし心地して、あげたる手は

天に届かず下げたる足は地につかず、また首尾なき雲間の蛟龍を夢みしと一般、たとひ深いところへ落さるゝとも、よしや山岳震動して風一疋飛出すの愚弄に逢ふとても、その玉章そのまゝ見通すべきかと、三人もろとも走出でゝ岩清水に口を嗽ぎ手を洗ひつゝ内に入れば、齋藤まちうけて靜かに澁茶を汲直しながら、まづ咽喉を濕はし玉へ、我も一碗かたぶけて、そも〳〵その美人が來歷よりこの艶書の因緣つぶさに物語らむとぞ膝を乘出しぬ、

來歷境遇かくの如く容貌氣風また斯の如く、前後左右より內外の有形無形に至るまで一點の瑕瑾もない美人の標本、いはゆる人爲の外に於て自然に備はりし當世令嬢の摸型とも稱すべき千代子が、件の因緣てゝに熟して將に鴛鴦の夢あたゝかならむとする折しも、獨乙種の犬と一般に見出されて其設備に當てられたる拙者、これはまた目鼻の置所さへ轉倒したる醜男の標本、いはゆる人爲の外に於て自然の滑稽に出來上つたる齋藤拙夫に、戀も戀あの一命をかけての戀あらむとは諸君いかゞです、天の配劑の奇なる、神の戲謔の酷なる、美の極と醜の極を結びて一場の狂を演じられたと思ふより外は、さらに何の理由を見出す能はず、いかな哲學者を呼出しても殆ど研究の問題外かと思はれます、

三人も今ば容を改めて肅然たる無言の體、齋藤いよ〳〵見詰めて滿身の大息を漏しつゝ、されど拙者その實を見るまでは この令嬢に我を落ふの戀ありと思ふべき筈なく、たゞ例の如

く悠々として獨乙夫の役目を拳じ、芝の山内にありし琴の師匠が濱町に轉宅せしを訪はむとの事にて、宿車二臺そのまゝ高繩の家を飛出せしが、いつになく令孃の差出口にて、その師匠の家より二臺の車を歸せしが抑も事の發端、されど此時なは怪しまず、それより向島の百花園に跨ひ、また立戻つて淺草の公園を徘徊ひ、幾度か歸路を促せども更に聞へぬ風情が抑も第二の不審、されど此時なは怪しまず、折しも夕暮の空に人なき本堂の後背へ差かゝりし時、俄かに我を振返つて、夕飯の用意せよと十圓札一枚を差出されたが抑も第三の不思議、この時やう〳〵心に向とやら怪しめども、やむを得ず或料理屋に誘ふて膳に向ひながら、かくまで美醜雲泥の男女、云かも風采の懸隔といひ進退言語の相違といひ、誰か夫婦と見るべき、まして人云れぬ忍ぶ戀路の道草とや思ふべき、現

在の我なは此時さらに怪しまず、たゞ平生に似氣なき令孃の振舞、そも〳〵これが抑て我に浮世を作らぬ懷中生育の小兒同然と心得、たゞ一時も早く家に連歸らむと思ふのみ、この上の我まゝに强ねられては叶はじと思ふ折しも、令孃が玉を展べたる眞白の細き指頭いつしか我手首に確と纏ふて、いきなゝ〳〵と張詰めし秋水の目元に一點の曇りを帶び、花の顏そのまゝながら際間もる風を脈ふが如く、果は堪兼てや身も世もあられぬ風情にて、いづこの里へなりと連退てたも、それが嫌なら隅田川に身を投げて死ぬとぞいふ、

うつゝか、夢か、戀か、狂か、愚か、戲か、古今の不思議、人事の奇怪、あッと驚き呆れて一言もなき我膝に生命もろとも身を拋かけての忍び泣、今更ら繰返して物いふも恥かしとや、帶の間より取出せし一通の艶書を見れば、そも〳〵この戀き

のふけふの事にあらで、かねてより人忘れず情致にあまりし魔女の一念、もはや理の外です、人間の常をもて論ずべからざるもの、これを切抜けむとすべき筈の千思萬考いつしか去て、たゞこの可憐なる天女が情の露を總身に浴びつゝ雲に乘りしが如き心地、下界の事は一切さらに忘れ果てたる我また既に狂か愚か戀か夢か、うつゝの分別もなく其まゝ引連れて駈出づるや否、斯れほどの醜男が斯れほどの美人を携へて滿都いづこに隱れ家のあるべき、さりとて東海道の滊車は危ふし、東北線も人目をげくて心安からず、さらば落付く的もなく知己もなく何の縁も由縁もなき甲武線にと、飯田町の停車場より滊笛一聲、竪川に乘替て青梅の町に着きしが、名さへ得ぞらぬ宿に伴ふて其夜は寐もせず、燈火かゝげての差對ひに四邊を憚かりつゝ、なほも晴れやらぬ不審の底を探らむと、

さま〳〵の言葉を盡せし曉方、やう〳〵令孃の口より絞りいだせし最後の一言こそ、始めて以上の千奇萬怪を排して釋然たる刹那の一轉機、されどその一轉機は人生悲痛の慘憺を極めて鬼神も泣くべく、我また斯くの身となつて生涯を此山中の草木と共に朽果つべき源因なりと、齋藤扯夫かもはず兩眼の涙ぽろ〳〵と落しぬ、

三人なほも膝を進めて其仔細を問へば、齋藤いよ〳〵泣て首を左右に打振りながら、その曉の一言、これを今この我口より語るに忍びず、たゞ以上すべての我言葉に露いさゝかの虚偽なければ、諸君よろしく考慮を費やし玉ふべしと、この筆書に寫眞を添て再び三人の前に差出しぬ、

さらば玉章と三人もろとも疑を凝してみれば、なるほど、戀といふ曲物を魔女の一念に溢れて書連ねたるもの、當世名聞

の詩人が千萬言にも立勝りて哀れ深く、筆の運びに虚飾なく思ひつめし心の色に寸際なく、さかもこの艶書を受取りし本尊この男と思へば既に業に天下の奇なれども、曉に語り出せし最後の一言、それを聞かずば更に面白からず、そも〳〵初めは人も通はぬ山中に一葉の美形をもて驚かされ、二度目は其寫眞よりも此艶書に驚かされ、三度目の今こゝに臥龍點睛ともいふべき曉の一言、まして我口より語るに忍びずと聞けば聞くはど猶更ら以て聞きたしと、さきりに迫れども齋藤拗夫これのみは語らず、只おのれが兩眼より滝の如き涙を示して、この涙が物語る音を聞き玉へとぞいひぬ、

例の三人かくて東京に歸るや否、さらぬも喜怒哀樂を薄葉の

雁皮紙もて包めるに等しい徒輩、忽ち電氣に打たれたる心地また神仙に逢ふて懸の問題を授けられたるが如く、かりとあらゆる知己朋友を駈づり廻つて、珍談々々と狂するばかりに立騒げども、百鳥の百囀り、平生が平生として誰一人の相手にするものなければ、口惜しさのあまり腹立まぎれに、果は往復の路用より宿料飲食に至るまで三人が自腹を切ての上、もし虚偽ならば諸氏が思ふまゝの制裁を受けむとぞいふ、さらば一日の遊散かた〳〵彼奴等に欺されてみむと、こゝに好奇心の男十三人、うちつれて再び青梅の山中に分入りしが、かの草堂むなしく露に咽むで住みし人の影だになく、さかも時ふくれて秋の面白さも過去りしかば、三人その場に取圍まれて四方より鐵拳の罰則、雨霰と打たれながら、はて不思議、さても奇ぢや妙ぢやと叫べば、何が奇ぢや妙ぢやと又もや亂

打されて終に泣出しぬ、

事實あつてからが無いはどの不思議、まして其影もない今更ら何となるべき、全く以て斯くぞと辨解するはど三人いよいよ物笑ひの種となつて、果は狐狸に魔せられたりとの噂に終りて泣寐入となりぬ、

されど三人なは屈せず、かり〳〵相集りて物語りつゝ、あの曉の一言、その最後の一言、一言〳〵と一年あまり叫びしかど竟に悟らず、

齋藤拙夫さても其後いづこに行きけむ、あのまゝ無常を感じ過ぎて跡をくらす雲の山また山の奥に入りしか、あのまゝ悟り過ぎて再び凡骨を人里に運び戻せしか、千代子また生か死か行

衛も知れず、たゞ殘るは高輪にありし母親これが病の基となつて竟に果てぬ、

片輪車は假に設けたる一片の小説にあらず、まことに明治の今日ありし事實の不思議さを、いはゆる齋藤拙夫が最後の一言を讀者と共に戀の問題として、ながく研究の材料たるべき筆記なりける、

片輪車

終

19/11/35

明治三十三年十二月十日印刷
同　三十三年十二月十五日發行

著作者　村上信

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目十七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區土佐堀三丁目三十八番屋敷　嵩山堂印刷部

發行所　大阪市東區心齋橋筋博勞町角　青木嵩山堂　電話東二五〇番

發行所　東京市日本橋區通一丁目角　青木嵩山堂　電話本局七八九番

賣捌所　伊勢四日市市役町　嵩山堂支店

明治十年　著作權登錄濟　定價金四十錢

新版廣告

泉六著
赤蜻蛉 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

風葉著
武兄弟 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

水陸著
水の魔術 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

美妙著
斷腸錄 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

仰天子著
小說弓矢八幡 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

奴之助著
彌生物語 全二冊 正價金六拾錢 郵稅十二錢

仰天子著
伊達若衆 全一冊 正價金三十錢 郵稅八錢

仰天子著
源氏車 全一冊 正價金三十錢 郵稅十二錢

泉六著
原田甲斐 全三冊 正價金九十錢 郵稅廿二錢

小說はるさめ 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢
本書目次 弓矢の家運伴著○れば（朝紅葉補加賀のや著○花陽助兵衛泉六著○小杉直茂美妙著

鐵腸
過去之政海 全一冊 正價金三拾錢 郵稅八錢
鐵腸先生小傳及氏が傑作二十三年未來記、國會開設前後、過去錄等を掲載す

政治小說
落葉のはるさよせ 全一冊 正價金三十錢 郵稅八錢
附 鐵腸新聞經驗談

哄笑子編
お笑ひ艸 全一冊 正價金十六錢 郵稅四錢

順智滑稽
哄笑子編
頓智百談 全一冊 正價金十六錢 郵稅四錢

泉六著
狂歌集 全一冊 正價金十八錢 郵稅四錢

美妙著
美人詞林
衣香扇影 全一冊 正價金二十錢 郵稅四錢

美妙著
散文韻文
美文活法 全一冊 正價金四十錢 郵稅八錢

漢文小說
觀山先生評譯
剪燈新話 漢文小說 全一冊 正價金三十錢 郵稅六錢

新版廣告

赤蜻蛉	涙六著	全一冊	郵税六 正價金三十錢
武兄弟	風葉著	全一冊	郵税六 正價金三十錢
水の魔術	水陸著	全一冊	郵税六 正價金三十錢
斷腸錄	美妙著	全一冊	郵税六 正價金三十錢
小說弓矢八幡	仰天子著	全一冊	郵税六 正價金三十錢
彌生物語	奴之助著	全二冊	郵税十二 正價金六拾錢
伊達若衆	仰天子著	全一冊	郵税八 正價金三十錢
源氏車	仰天子著	全一冊	郵税十二 正價金三十錢
原田甲斐	涙六著	全三冊	郵税廿二 正價金九十錢

小說はるさめ　全一冊　郵税六　正價金三十錢
本書目次　弓矢の家憲伴者○ねぢ〳〵帳紅葉補加賀のや著○花房助兵衛涙六著○小杉直茂美妙著

鐵鵬過去之政海　全一冊　郵税八　正價金三拾錢
鐵鵬先生小傳及氏が傑作二十三年未來記、國會開設前後、鴻雪錄等を掲載す

政治小說落葉のはきよせ　全一冊　郵税八　正價金三十錢
附　鐵鵬新聞經歷談

喫笑子編
紙習滑稽　お笑ひ艸　全一冊　郵税四　正價金十六錢

喫笑子編
頓智百談　全一冊　郵税四　正價金十六錢

涙六撰
狂歌集　全一冊　郵税四　正價金十八錢

美妙著
美人桐林　衣香扇影　全一冊　郵税四　正價金二十錢

散文都文　美妙著　美文活法　全一冊　郵税八　正價金四十錢

顧山先生評釋
獨習本　漢文小說　剪燈新話　全一冊　郵税六　正價金三十錢

小說新版豫告

涙六著
まゝと心　一冊

涙六著
明治十年　一冊

涙六著
涙華名物男　三冊

幸田露伴　田村松魚合作
新三保物語　一冊

小栗風葉作
半元服　一冊

水陸著
金剛石　一冊

涙六著
五人男の内
上田力　一冊

涙六著
五人男の内
倉橋幸藏　一冊

涙六著
五人男の内
川上三吉　一冊

涙六著
五人男の内
吉田雄藏　一冊

大澤天仙作
善道邪道　一冊

松居松葉作
女の義理　一冊